

---

# 妖精さんファンタジーライフ

うぱッ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖精さんファンタジーライフ

### 【Nコード】

N2582Q

### 【作者名】

うぱっ

### 【あらすじ】

妖精はいつのまにか発生し、自然に宿りる存在である。そのなかでも一風変わった妖精たちの生涯をえがいた友情の物語（仮）。

## 一日目：妖精たちのある日の出来事（前書き）

本作が初投稿な上に初の物書きとなります。駄文ですが読んでいただける方が少しでも楽しんでいただければ幸いです。ありふれた内容だったりテンプレな内容だったりするかもしれませんが、徐々に個性を出していけたらと思います。ゆっくり更新になると思いますが完結を目標に頑張ります！それでは『妖精さんファンタジーライフ』開幕です。

## 一日目：妖精たちのある日の出来事

最初はぼんやりとただよっていたと思う。ふわふわした感じが心地よかったのを覚えている。ただ、明確な意識はなかったため記憶は曖昧だ。おそらくそこから中を飛び回っていたのだろう。

私は名前を瑪瑙という。名前はたまたま拾った宝石が気に入り、その宝石の名前を知ってから瑪瑙と名乗っている。元気澀刺、とまではないがここに広がる大草原でよく遊んでいる大地の妖精だ。最近、自己を認識するようになり些細なことで考え込む毎日を通している。

最初に自分を認識した時はすでに広大な草原を飛んでいた。ふと目にとまった花を眺めていたのが記憶に新しい。花の香りは心地よいものであり、新しい花を見つけては隅から隅まで眺めた後、地面を掘り返して根っこを観察する作業をひたすらに繰り返していたものだ。

生まれてからそれなりに時間が経った昨今でも、新しい花をみつけたらつい掘り返している自分に気がつく事が多い。いつの間にか癖になっていたようだ。

時には何を思ったのか、花をおもむろに口の中へと放り込み食したこともある。草花によって味が違うことに驚き、なぜ味が違うのかと何日も悩んだあげく、結局分からないという結論に達してしまふことがほとんどだ。そういう時は決まって仲間に阿呆と言われる。正直かなり気分がへこむが次の日には気分爽快になっている自分はそうとう能天気なのだろう。

そんなこんなでどうでもいいことばかりしている私であるが、現在は近くの森で巨大な木を見て以来、なぜ木はあんなにも大きくなるのかを考えている。

そして、ふと自分に話しかけている声があることに気がついた。

「おーい、聞こえてるー？」

「あいかかわらず、よく唸ってますね。何を考え込んでいるのかしら？」

「今日もいい天気だね。絶好のサバイバル日和だぞ！」

「ふふー、いまのうちに頭の上にカエルを乗せるのだー。」

どうやら周りから声を掛けられていたようだ。よほど考えることに没頭していたらしい。

「ええと、どうして木は大きくなるのだろうか。」

「相変わらず、実にどうでもいいことですね。」

間髪いれずに答えが帰ってきた。私の疑問は心底どうでもいいらしい。

ふと顔をあげれば深緑の髪をした妖精が目に入った。今しがた辛辣な一言を言い放った張本人である。彼女の名前は梢、樹木の妖精らしい。私たちの中で最も年長である。早くから自分というものを自覚している妖精という表現の方が正しいかもしれない。白いシャツの上に長袖のジャケット、下はロングのスカートを穿いており、明るい緑を基調とした服装をしている。ゆったりとした立ちふるまいと言葉遣いは周囲に安心感を与え、彼女はみんなのまとめ役のような存在となっている。落ち着いた雰囲気をはなっている彼女だが腹黒いと思っっているのは私だけではないはずだ。先ほどからずっと

浮かべているその微笑がとても気になる。何を考えているのかさっぱりわからない。

他にも数匹の妖精がいるが、彼女たちは自分の名前がない。どうやら生まれたばかりの妖精は名前などどうでも良いらしい。名前を聞いてみても、考えたことないやと流されて何もなかったことにされること柳のごとし。それでもコミュニケーションが成り立っているから不思議である。

「ところで、今日は何をするんだい。」

「まだ話し合いの途中ですよ、瑪瑙。その耳は飾りかしら？」

「お日様ぼかぼかー。」

「よし、サバイバル土合戦しよう！」

「今日も腕が鳴るよ！」

みんな元気いっぱいである。いいことだ。今回は罾をしかけては人間をひっかける遊びを飽きるまでずっとやっていた気がする。最後の方はぼーっとみていたが梢の罾はともえげつなかった。つまり転んだ先がひどいぬかるみだったり、避けたところがちよつど落とし穴でやつぱり中はぬかるみだったり、人間がとてもかわいそうだった。あれを見れば他の妖精たちも思わず同情してしまうだろう。でも眺めているのが私である。

ちなみにこの地域には様々な生き物が住んでいるが、その中でも賢いものは人間という生き物だろう。他の生き物を狩る際に集団で追い詰めたり罾を仕掛けたりする光景をよく見かける。罾遊びの発端はこの人間たちの影響と言ってもいい。

「いいからサバイバル土合戦やろうよ。」

「サバイバルやろうよー。」

「私の装弾はれぼりゅーしょんだ！」

「光合成日和だねー。ぼかぼかー。」

「皆さんやる気いっぱいですね。それでは土合戦で遊びましょうか。」

「サバイバル土合戦だよ！」

いつものまにか土の塊をぶつけ合うサバイバル土合戦で遊ぶ流れが出来上がっている。みんなが適当にやりたいことをあーだこーだ言うって、梢がまとめる。これが私たちのお約束。

「土いじりは私の領分、プロフェッショナルの実力に恐れおののくがいい。」

「ふふふ、そんなに大口叩いて恥を掻いても知りませんよ？」

売り言葉に買い言葉、やる気も十分、今の私に死角はない。最初からエンジンはフルスロットルだ。大地の妖精の血が騒ぐ。

「先手必勝、そーれツ！」

いきなり私の顔めがけて土の弾が飛んでくる。そなた、始まる前から準備していたな……？だがしかし、この程度の不意打ちで当たる私ではない！

「その程度の不意打ち、あたるほど甘くないツ！」

その場にかがむことで弾をかわす。その瞬間、私の栗色のショートヘアーから何かがはねた感触がした。なかなか危機一髪であったようだ。問題はない。かがむと同時に土を掬い、体を起こすと同時に形を整える。反撃の態勢は万端だ。この手際の良さ、我ながら恐ろしい。

「頭の上が、から空きだよ！」

「今度は上かつ！しかしッ、声が聞こえれば居場所は分かる！」

相手を確認するために上を向いた瞬間、私の顔に何かが降ってきた。

「へ？」

ぺたっ、という音がしそうな感じでその何かは着地した。ひんやりとするような、しかし、ぬるぬるする感覚が顔全体にまわりついてくる。

「え、ちよっと、前が見えないんですけど。しかも何かぬるぬるするんですけど。というか感触が気持ち悪いんですけどおおおおおおおおお！」

いかん、焦りすぎて何を言っているのか分からない。落ち着け、こついう時は今まで食べてきた花の味を思い出して落ち着くんだけ。戦場では焦ったものから死んでゆく。野生動物の生存競争を思い出せ、焦った者の末路は悲惨であることを忘れたか！

心を落ち着けようと思った矢先に顔の上の何かは再びはねる。光が戻った私の視界にそれは姿を現した。

「か、蛙だと！？いつたい……」

事実には驚愕していたその時、顔面に衝撃が走った。

「なぶあつぶ！」



こやつ、ちやつかり石を入れてやがる……。痛いぞコンチクシヨウ。  
「ふふー、メノウちゃんの頭の上に蛙さんを乗せていたのだーっ！  
積み木の達人は伊達ではないのだ！」

まさか、蛙が視界をふさぐのを予測して声を掛けてきたというのか。積み木はどうでもいいが何という策士、侮れん……。しかし、遊びを決めている間に蛙を乗せられた記憶はない。ではいつのせられたのだ？うわっぶ、口の中に土が入ったぞ！

「あらあら、ずっと頭に蛙を乗せていたので敢えてそのままにしていたのかと思っていたのですが、本当に気がついていなかったのですねえ。」

容赦なく追撃をしてくる梢の言葉を聞いた瞬間、私はすべてを理解した。

「まさか、考え事している時から乗せていたのか！なんとという計画的犯行だ！」

「えーと、普通は乗せられた時に気がつくと思うんだけど。蛙ってひゃっとしてるし。」

「まったく、瑪瑙はおとぼけさんですねえ。」

「くそっ、油断してたからって、好き勝手言いやがって、気がつかないものはしょうがないかあああああああああああ！もう、どうなっても知らないんだからな！」

飛んでくる弾などお構いなしに、かたっぱしから撃ち落とす。土をつかみ、握って固めて投げつける。ただひたすらに投げ続ける。一心不乱に撃ち落とすッ！

「八つ当たりをおもいしれええええええ！」

人数差？そんなものは知らん、関係ないね。蛙の恨みは怖いのだぞ。教えてくれないじゃないか、うわあああああああああああ  
ああ！

「うわっ、メノウちゃんがきれたーっ！」

「これが大地の妖精の本気か。3人掛かりの弾幕を撃ち落とすとは化け物かッ！」

「んー、今日も空がきれいです。」

「私としては、私たちと瑪瑙に挟まれているのにもかかわらず、すべて避けているあの子が一番驚いているのですが……。ずっと空を見上げてるのに背中に目が付いているのかしら？」

「あははっ、私は風になるー！」

「くそっ、さつきよりも弾幕は激しいのかすりもしないぞッ！風の妖精は化け物か！」

気がつけばそこは戦場、土の弾が飛び交う激戦区と化していた。

時は夕暮れ、空は朱色に染まり日が傾いている。

「くそっ、多勢に無勢だよ……。ぐすん。」

「いい子だからそろそろ泣きやんでください。私達も少々大人げなかつたですね。」

「多勢に無勢といいつつも互角の勝負だったのは気のせいかな？すごかつたよー！」

「血がたぎる楽しいサバイバル土合戦だったね！またやろうよー。」

「夕日がきれいですよー。とんぼさんがぶんぶんぶん。」

「いくらなんでも蛙は想定外の範囲外だよ。次はこっちから仕掛けてやる！覚えておくがいいわ！」

結果はもちろん私の敗北。途中までは善戦したものの、やはり数には勝てずにおしきられてしまった。次にやる時は何をしてやろうか……。ふふふ、楽しみになってきたぞ。

そして泥だらけになるまで遊んだ妖精たちは、仲良く家路へとつくのであった。

くオマケ また別の日の土合戦く

「そして今日も、お日様沈んでいくのですー。」

「ぜえ、ぜえ、なんで君はそんなに余裕があるんだい？」

「信じられるかい、この子、ずっと弾幕の中心にいたんだぜ……。」

「どうということなの、ぜえ、はあ。」

「将来大物になりそうねえ……。」

「あはははは、風が気持ちいいのですよー。」

私は既に大物だと思っただが、いかがだろうか？それよりもどうやって避けていたかがとても気になる、そんな事を考えていた夕暮のひとこまだった。

一日目：妖精たちのある日の出来事（後書き）

気がつけば見切り発車で書いていた今日この頃。服装と時代があつていなかつたりするが気にしてはいけない。だって妖精さんだからね！

それにしても個性出すのは大変ですね。ちゃんと出てるのかしら……。それに加えて、一人称とか三人称とか台詞とかを意識して書く事はハードルが高くていっぱいいっぱい……。普段何気なく読んでいる他の作品の作者さんの実力に脱帽です。

また、おかしな部分があれば指摘していただけると助かります。

二日目・日向ぼっこはけのもと、直接じゃなくて間接的に

妖精は自然に宿る存在である。草木はもちろん私の宿る大地を始め果てには太陽や月、星をつかさどる妖精もいるらしい。要するにどんなものでもいいのだ。自然が広がれば妖精が増え、妖精が増えたらさらに自然が豊かになる。ここまで言えば、勘のいい方は何が言いたいのかは分かるだろう。

「やあ、おはよう」

《おはよー！》

そう、妖精が増えたのである。それも大量に。仲間が増えることはいいことなのだが、色々と厄介なことが増えてきていることが悩みどころだ。その悩みをいくつか挙げてみるとしよう。

「花の妖精がどこにいるか知らないかい？」

と、尋ねれば各々の示す向きが全部違う。

「風の妖精さん、ちょっときてー」

と、声をかければ大人数が押し掛けて収拾がつかなくなる。

「皆のもの！今から『第10回サイバル土大戦』を開始する！」

《うおおおおおおおおおおおおおおおお！》

……最後の例は特に問題ないな。むしろ人数が多くなって合戦から大戦になるくらい大好評だ。

とにかくだ。以前までは特に気にすることはなかったのだが、名前がないと不便になってきたのである。なぜか急に増えだしたのかは知らないが、より楽しく遊ぶためにも名前は必要だと思っている。相手と呼ぼうにも区別がつかなくておろおろするのは実にいただけない。

「というわけでだ。梢は何かいい案はないかな？」

「いきなり私に振らないください。しかし、確かに不便ですねえ」「難しく考えないで日向ぼっこでもしていればいいと思うよー」

「名前かぁ。あつたらいいですけど、広めると言っても……」

「うちに言われてもわかんないよう。それよりも遊ぼうよ！」

「いつも通りの回答をありがとう」

そんな訳で話し合いに持ち込もうとしたのだが、こいつらのマイペースぶりは相変わらずだな。一部どうでもいい返しが戻ってくる。名前と言えば、梢以外の三人も自分の名前を名乗るようになった。私と梢が名前で呼び合っているのを真似したそうだ。それからというものの、いつそうと個性的になって場がさらに混沌となることが増えてきた。

まず、暇さえあれば日向ぼっこをしている妖精の名前はフキ。

肩口まで伸ばしたはねっけの銀髪に、ぱっちりとした目が特徴的である。瞳の色は私よりも少し濃いこげ茶程度の色をしている。妖精の象徴ともいえる透き通った羽は夕陽のようでも綺麗なのが印象的だ。

余談であるが、私の羽は白く透き通った色をしている。大地の妖精としては、風の妖精であるフキの羽と色が逆じゃないのかと常々感じている今日この頃だ。

次に、仲良し五人組の中で割と積極的に意見を言ってくれる子はアルナム、花の妖精だ。面倒見の良い彼女は生まれたばかりの妖精たちに好かれている。なんだかみんなのお姉さんという感じだ。ウ

エープのかかったブロンドの髪は手触りがとてもよく、髪の毛をいじられている光景をよく見かける。あの髪の毛は妖精たちの宝と言ってもいい。

「お、人間発見。さっそく突撃なのだ！」

こやつ、一目散に飛んで行きおった。もはや場の流れは修正不可能だな。たった今突撃していったのはウィンクル。本人いわく陽気の妖精らしいがいったい何から発生したのか謎である。春のようなイメージが強いが違うらしい。遊ぶことが大好きな彼女は赤髪ポニテールをゆらしながら機をうかがっている。しかし気付いていないのだろうか。別の角度から丸見えだぞ。あ、見つかった。

さて、話は戻るがいい加減、妖精たちに名前がないと困るのである。名前を付けなければいけないじゃない？と思われるだろうがそこには一つの、しかし、一番重大な問題が立ちふさがっている。

「そもそも、妖精たちは名前をそこまで重要なものと思っていないですよ」

「名前はコミュニケーションの手段の一つだからね。共通認識が必要だ。そういうものが必要と感ぜない限りはどうでもいいだろう」  
そう、名前などなくてもどうにかなる程度の数しかなかったから放っておかれてきたのだ。数が増えてきた今では必須なものになってくる。

「私から言わせてもらえば、身の回りの物の名前は区別されているから、自分に名前をつけないという事実の方がしんじられないよ。おまけに妖精も増えているのに無関心だ。訳がわからん」

「言い過ぎのように感じますが反論しようとも思えないですね」  
「自分の名前を言うようになってからお日様がもつと気持ち良くな

ったよー」

「え、ほんと？うちも日向ぼっこしてくる」

さきほど人間に撃ち落とされたというのに、ウィンクルはすごい速さで日向ぼっこしに行った。一応、話し合いの最中なんだがもう話題がそれ出している。

「日向ぼっこの感じ方は各自違うだろうに。気のせいだろう」

「ん？日向ぼっこはすばらしいよ？」

「いや、私には日向ぼっこの違いが分からんよ」

「何を！瑪瑙は何も分かってない！森を抜けたところの丘はあったかい時に一番だし、森の中の空き地は暑い日の日向ぼっこに最適なんだぞうー！」

「それ以前に日向ぼっこの違いが分かることが、名前とどうつながるのかが分からないよ。それに暑いときは日向ぼっこじゃなくて夕涼みに限る。暑いのにどうして温まらなくてはいかんだ」

「二人とも、脱線してるってば。日向ぼっこの話ばかりじゃないですか。」

「む、いつの間にか話がそれていたな。そういつわけで他に何が変わったことか思い当たることを各自言ってみよう」

また脱線してしまったか……。うーむ、話をそらす気はないのだがそらさないのも難しいものだ。

「んー、日向ぼっこしながら寝るのが心地いいよー」

「だから話を逸らさないで下さいよっ！」

アルネムがかなり必至だ。流石にちょっと悪い気がしてきたなあ……。



「話を戻しますね。私はしなびたお花によくお水をあげるのですが心なしか元気になるのが早くなっている気がします」

「ふむ、しかし曖昧だな。実際に効果があるかどうか分からない」「たしかに……」

自分で言っておいて何だが感覚的な事柄しか出てこない。私もしいて言えば土を握って固める動作がさらに素早くなった気がするくらいだ。自分でもどうでもいいと思ったのは初めてだったぞ。

「そうですねえ。私は最近こんなことができるようになりましたよ」

梢はそういとういきなり私たちに手をかざしてきた。するとどうだろう、手から光が出ているではないか。なんだかぽかぽかする。あれ、光がどんどん強くなってきてないか？そう思った瞬間

「うおっまぶしっ!」

「目が、目がああああああ!」

「おー、暖かいのです」

光が炸裂した。

「なんでも『照らす程度の能力』というそうな。気が付いたらできるようになっていましたの」

「うう、梢がひどいのですよ……。目がちかちかする……」

「まったく、何かするなら注意をしてくれてもいいじゃないか。目の前が真っ白だぞ」

「そうしたら私が楽しくないでしょうに。分かっていますねえ」

「君は実にサディストだな。分かりきっていたことだが」

「瑪瑙もさりとひどいと言いますね。傷ついてしまうのではないですか」

「それほどでもない。というか確信的にやるようなやつがこの程度なんとも思わないだろう」

「おおこわいこわい、泣いてしまいますよ?」

「二人ともここにこしなから言っていることが物騒ですよ……」

しかし、『照らす程度の能力』か。もしかしたら何か私もできるのかもしれない。

「能力か……。目覚めろ、私のパワー!」

「瑪瑙ちゃん、いきなり何を?」

「頭がおかしくなったのかしら?照らすだけで他には何もありませんが」

「いや、私も梢と似たようなことができないかと思ってな。試してみようかと」

「能力ですか?それならばやろうとすることができるものではないですよ。ある日突然、胸にすんと落ちてきましたからね」

なるほど、突然できるようになるのか。それならば気長に待つとしよう。だが先ほどから突っ込みがえぐるような言葉でしか返ってこない。へこみそうだ。私はいたってまじめなのに。

「ひとまず、このことは置いておいてだ。名前の普及をどうしようか。結局何も変わっていないわけなのだが」

「まあ、じっくりやっていくしかないでしょう。妖精は基本的に暢気ですから何かしらのきっかけが無いとどうにもならないかと」

「むう。この結論に達するのは何回目か……」

「ただいま!日向ぼっこ気持ちよかったですよ!」

「おかえりー!日向ぼっこは正義なのだ!」

ようやくウインクルが帰ってきたようだ。いつの間にかフキがウ

インクルに抱きついている。今の動き見えなかったぞ……。

「ウィンクルぽかぽかだねー。お日様ぱうあーたっぷりなのかなー」

「ん？ウィンクル、何か溢れてないか？」

「本当ですね。ウィンちゃんから暖かい感じの力を感じます。」

「え、うち何か変かな？もしかしてお日様パワー取りすぎちゃった？」

「もしかしたら能力が目覚めたのかもしれないね」

「能力？そういえば、目覚めろうちのパワー！ってやってたら『暖める程度の能力』っていうのができるようになったよー！」

「なん……だと……」

「日向ぼっこは偉大なのだ！みんなも日向ぼっこしようよー。」

おかしい、私は何のパワーも目覚めなかったのにウィンクルは目覚めただと……？これが日向ぼっここの力なのか。さて、ということは

「もしかして、フキも何か能力があるのかい？」

「んー？フキは『流れる程度の能力』だよー。風が気持ちいいのです」

フキまで能力をもっていただと！？アルネムは？アルネムまでもっていたら正直立ち直れる気がしない。気が付いたら私はアルネムの両肩をつかんでいた。

「くそう、なんでみんな持っているんだ！アルネムは！？アルネムは能力なんてもってないよな！？」

「あばばばば！瑪瑙、落ち着くのです、そんなに揺さぶらないでえええええええ！視界が揺れるうふう」

「あらあら、瑪瑙は元気ですねえ」

「見てるなら助けてくださいいいいい！」

「日向ぼっこして落ち着くのですよー。そおい！」  
「ぎゃあ！」

フキの掛け声と主に私の後頭部にドロップキックが突き刺さる。頭が揺れるどころかちぎれそうだ。濡れた木の枝を折るような鈍い音が聞こえた気がする。なぜ冷静にこんなことを考えていられるのかも不思議だ。あれ、なんだか、目の前が、暗く……。

そして、木の幹をへし折りながら栗色の髪の妖精は茂みに突っこんでいった。後に被害者は語る。何かあつたらしい、そして、いたい何が起こつたのだろうか、と。

「わーお……」

「えーと、瑪瑙ちゃん……？」

「うちの聞き間違えじゃなければ木を数本ぶちぬいたと思うんだけど……」

「……はっ、とにかく安否の確認に行きますよ。事と次第では洒落になります！」

「あははは、やりすぎちゃったかなー？」

「はやく手当てしないと！瑪瑙ちゃん！無事でいてえええええ」

うむ、すがすがしい朝だ。木漏れ日が心地よい。今日こそ妖精に名前を普及するにはどうすればいいか答えが出せる気がする。む？私はいつ寢床に入ったのだ？それになぜアルネムがすぐ横で突っ伏している？珍しいこともあるものだ。

「アルネム、こんなところで寝てるとは珍しいな」

「……うあー、それはまずいよー。……だからまずいって はっ

！？夢か」

「朝からハイテンションだな。今日は岩でも降ってくるのだろうか」  
「そんな訳ないです！それよりも瑪瑙ちゃん、体はどこも痛くないですか！？とくに首のあたりとか首のあたりとか！」

「いきなりどうした。全く意味がわからないよ？」

「え、もしや……。だとしたら……」

「いきなり自分の世界に入らないでくれ。アルネムがこんな調子だと本気で今日は変なものが降ってきてそうだ」

まあいい、今日も一日楽しく過ごすとしよう。

くオマケ 妖精たちの秘め事

瑪瑙の目が覚めた後、とある妖精たちは森の中の空き地に集まっていた。

「どうも、先日何があったかをまったく覚えてないようなのですよ。きれいさっぱり丸一日です。本人は何事もなくいつも通りの朝が来たと思っていました」

「ふむ、このようなことは初めてですね。何事もなければいいのですが……」

「あれだけやばそうな飛び方してたからな！。むしろこの程度で済んでよかったかもしれないよ。うちとしては、既にぴんぴんしている瑪瑙の回復速度のほうがおかしいと思うんだ」

「瑪瑙、無事でよかったー」

「フキ、あなたが元凶ですからね？ちゃんと反省しなさい」

「ふみゆっ！？たたかなくてもいいじゃない！でも、あんなことはもうしないよう……。瑪瑙、起きなくてすごく怖かった……」

「ともかくこの件は下手に掘り返さない方がいいでしょう。最悪、瑪瑙がまた暴走します」

「そうですね。せめて瑪瑙ちゃん的能力が目覚めるまでは封印しておいた方がよさげですよ」

「すでに発動してるんじゃないかねー。『衝撃を飛ばす程度の能力』とか。あの木の折れ様はただの妖精がぶつかったようなものじゃなかったよ」

「ふむ、ならばさりげなく探りを入れてみましょう」

「んー、瑪瑙まで能力出てるとするなら、あとはアルネムだけだねー」

「私ですか？そういうえば看病している時に能力が発現したのですよ」

「へえ、どんな能力だい？」

「『元気になる程度の能力』だそうです。本当に私向きですね」

「なるほど、そうすれば花のことも説明がつかますね。と、また話がそれてしまいました。あの件については細心の注意を払うように。いいですね？」

「了解なのだ！」「もちろんです！」「イエス、ママ！」

何か昼間と話し方が違うじゃない、ですか？彼女たちは友達思いなどでもない子たちなのです。反省もすれば成長もします。私も含めて、ね。

二日目・日向ぼっこはけのもと、直接じゃなくて間接的に（後書き）

無事、第二話が完成しました。お題は東方おなじみの「能力」の会です。プロットをある程度作っておいたはずなのにかなり時間がかかってしまいました……。瑪瑙の能力はそのうち出てきます。

まだ妖精さんしかでていませんがイメージとしては原作のはるか昔です。そのうち原作に入っていくと思います。完結まで気長に読んでいただけたら幸いです。次こそ妖怪を出すんだ……。

三日目：闇夜の晩、みんなで行けば怖くない。そんなことはなかった。

最近人間が大きな集落を作った。それにともない人里にちよっかいを出しに行く妖精が多くなっている。まあ、食糧を少しくすねたり、いがぐりを混ぜてたりといったしょうもないことが大多数だ。だが中には夜の間に落とし穴を掘ったり、人間の住む家の出入口にちよつとした細工を仕込むといった手の込んだ職人技を発揮する妖精もいる。

人間も慣れたもので最初のうちはひっかかりたりすることが多かったが今では普通に対処されることがほとんどだ。新しい手と対策のいたちごっこがどこまで続くかが見ものである。

このように人里に行く妖精がたくさんいるわけだが人間たちの噂も多く入ってくるようになった。ちなみに、妖精がどう思われているかというところ、やっかいものでもあるが妖精がよく出没するところは実り豊かであるとのことなので、いたずら好きな自然の精霊という評価らしい。なるほど、どおりでちよっかい程度ではそこまでひどい仕打ちを受けないわけだ。まあ、私の流行は土や岩を削って作る彫刻なのであまり関係はないけどな。

そういえば、ひとつ興味深いうわさがあったな。確かあれはついこの前のことだったか……。

「ねえねえ瑪瑙！帰らずの森ってしってる？」

「ウインクルか。藪から棒になんだい？私は今忙しいのだが」

「……何これ」

出会いがしらにいきなり驚いてくれたようで作ったかいはあるというものだ。今、ウインクルの前にはおびただしい数の芸術が広が



っている。全部私作り上げた彫刻群だ。ただ単純にその辺りあるような草花を始め、人間の姿を模ったもの、妖精たちの日常を模して作った作品、そして人間が作り出した道具の形を真似たものまで多岐にわたる。私としては大分モデルとなったものが分かるようになったと思っている。ここまで来るのにかなり苦労したが実に充実した時間だった。

「ふふふ、よく聞いてくれた！これはだな」  
「そおい！」

突然私の脇腹に衝撃が走る。

「どうぶつはあー！」  
「やつほー、瑪瑙！」  
「ぐおおお……。なんだか以前も似たようなことがあった気がするぞ……。」

そこには満面の笑みを浮かべたフキが抱きついていて、笑顔がまぶしい、だが私はその程度の笑顔では誤魔化されんぞ、絶対にだ！……無駄にいい笑顔で追求しにくいのも事実だが。

「おーい、私の話をきいておくれよ……。」  
「げほつ、帰らずの森というものか？私は知らないな。それよりもこの彫像をどう思う？」  
「原型が分からないよ。何作ってんのかは知らないけど、とにかく帰らずの森ってのがあつらしいんだよ！人間の噂なんだけど、どうしてか月のない夜に入った人間が帰ってこないんだつてさ！」  
「そんな馬鹿な……。いつかこの芸術性に気がついてくれると信じているよ。それにしても、最近の人間は月のない闇夜にも出歩くのか」

「ほえー、不思議だねえ」

「それでね、人がいたはずの場所は大きな爪痕があるんだって！そこで、何があるかみんな確かめにいこうよ！梢がいれば夜道も安心だよ！」

「ふむ、それもそうだな。久々に遠出をするのも悪くない」

「なら決まりだね！よし、みんなで梢を引っ張り出しに行くよ！」

私のところへ来る前に周りを固め終わっていたことに戦慄したが、確かにこの話はとても興味深かった。なにせこれまでにない異質なことだったからな。今までにない妖精でも生まれたのかとも考えたが妖精がそのようなことをするとは考えにくい。よほどのことがない限り、自然があれば妖精は消えることはないのだから。今晚はちょうどその月のない夜にあたる。そろそろウォーミングアップをするとうとう。まあ、ウォーミングアップと言ってもひたすら彫刻をする作業が変わることはないんですがね。

最近私は『土を固める程度の能力』という能力を扱えるようになった。簡単に説明すると、土を固めてある程度自分の思うように操ることができる。効果範囲は大体私が認識できる範囲のようだ。この能力をつかえば手を使わずとも土の弾を作って放てるためサバイバル土合戦をするときは重宝している。近頃はこの能力を使って土の塊を作ってはそれを彫って彫像を作っているわけだ。

能力を自覚したのは土合戦の時だったのだが、驚いている間に積みこまれてしまった。一瞬の油断が命取りになっている今日この頃である。その後にもみんなも能力を使えることを知り、はぶられていた現実を知った。現実残酷である。絶望した！

色々あったわけだが、私は能力を磨くために日々頑張っている。芸術をいつか認めさせてやるんだ……。

それにしても今晚が楽しみだ。お、この彫像はなかなかいい出来

だな。

時は飛び、日が落ちてあたりは暗闇に包まれている。昼間とは打って変わり森は不気味な静けさを醸し出している。私たちは梢を先頭とし、その後ろにウィンクル、アルネム、フキ、最後尾が私という並びで探検中である。さて、件の『帰らずの森』であるが昼間は鳥がさえずり、妖精たちの遊び場にもなっている名スポットであったはずだがそれも夜では全く逆の寂れた印象を感じる。まるで森全体が眠っているようだ。

「うわー、とても不気味だなあ。昼間とは大違いだよ」

「いまにも何かが出そうで怖いですよ……」

「あらあら、二人とも服をそんなに強く引っ張らないでもらえますか？」

「わー、ウィンクルがぶるぶるしてるー」

「ほう、言いだしっぺがどうしたのかな？」

「べ、別に怖くないもん！離れてても平気なんだからね！」

必死に言いつくろっているが、はたから見ればびくびくしているのは丸分かりだな。そんな所も彼女の魅力だと思う。ここはひとつ楽しませてもらうとしよう。少しからかってみるのも一興だな。

おもむろに土の塊をつくりだし、皆に分らないように茂みに飛ばす。するとガサツという音が鳴る。

「ひぎゃっ！」「はっつっ！」

「ん？ウィンクル、いったいどうしたんだい？」

「な、なんでもない　ってそのにやけ面は何よ！きになるじゃないー！」

「あらあら、ウインクルは怖がりさんですねえ」

「だから、こ、怖くなんかないんだからね！」

「むむ、それは心強いな。私は先ほどから平静を保っているのが精いっぱいだね、頼りにしてるよ、ウインクル」

「私がいればどんな時でも安全　　！」

ここで再び大きな音を立てる。先ほどよりも塊の数を増しましたぞ！

「だっひゃあ！」

「いきなり変な声を出しているが大丈夫か？」

「ただ、大丈夫よっ。これは目から汗が出てるだけなんだから！」

「くすくす、瑪瑙もほどほどにしないと痛い目を見ますよ？」

「はっ、もしかしてッ！うち、遊ばれてたの！？うわああああん！瑪瑙がいじめるよー！」

「つい反応がいい上に微笑ましくてな。ゆるせ」

「ひどい、ひどいよっ！瑪瑙の馬鹿ああああああ」

「ぶふああー！」

叫び声と同時にビンタが炸裂した。とっさに土で防御できたが見事に打ち抜かれたようだ。頬がじんじんする。しかし、流石にいじり過ぎたようだ。泣かせてしまうとは悪いことをした。次は匙加減を間違えないようにしよう。

「うう、さっきから心臓に悪いですよー」

「アルネムー、フキがついているから安心するのよー」

む、アルネムも大分消耗してしまっている。どうやら本当に度が過ぎていたようだ。これは反省しなくてはいかな。な。

「しかし何もいませんね、不気味なまでに。動物の一匹でもいてい

いと思うのですが」

「も、もしかして本当に怖いものがあるのでしょうか……」

「ぐすっ、うちは何かが出る前に心が折れそうだよ」

「正直やり過ぎたと思ってる。すまんかった。だが、後悔はしておらんよ」

「最後の一言で台無しだよ!？」

「だが、緊張はほぐれただろう?」

「まあ、それはそうだけでもっと他にやりようはなかったの……」

私としてはいい反応が見れてごちそうさまというところかな?これは心にしまっておくとしよう。ウィンクルが本格的にキレかねない。しかしだ、最近フキは抱きつき癖でもついたのであるか?安心させるためかどうか知らないが、今はアルネムに抱きついていて。ちやつかりアルネムの髪まで梳いてやがる……。その位置を私と替われと言いたい。

この後も一晩中森の中を探検したのだが、結局この日は何も起こらなかった。

「何もなかったな、あつけない」

「期待していた結果とはまったく違いますねえ」

「むー、つまんなーい!」

「私としては何も起こらなくて一安心ですよ。怖かったあ……」

「うちはいじられ損だったよ、瑪瑙が妖精じゃなくて別の何かにか見えなかった」

「そういうな。しかし噂はしよせん噂だったのだろうか」

「変わったことがあればまた耳にするとと思うよー」

「むー、うちとしては真相を解明したかったのに……」

「あ、そういう人は消えるけど妖精が消えたって話はなかったかもー」

「確かに、このあたりは遊び場ですから妖精は結構来るはずですよ

ね」

「じゃあ、妖精だけじゃ狙われないのかもしれないな。」

「それだ！今度は人間の後をつけられれば何かが分かるかも！」

「それ以前に人間が出歩くのか？」

「あ、それもそうだなあ。でもいつかチャンスはあるはず！」

「確かにこのまま引き下がるのも楽しくありませんね。次に来る時は人間の後をつけてみることにしましょう」

もう一度行くことになってしまったが、自ら危険に突っ込んでいくほど人間は馬鹿じゃないと思うなあ……。まあ、気になることも確かだし機会がくることを期待しようか。

あれから何度か月のない夜が過ぎた。現在人里は少し騒がしい。私たちは人里に張り込みを繰り返してきたが本日はいつにも増して穏やかじゃない。

「おい、大丈夫か！しつかりしろ！」

「はやく手当てをするんだ！」

どうやら人が運び込まれているようだ。生き残った人間が何かをしゃべっている。

「お、おれ、見たんだ……。口から血をたらしながらこっちを見る化け物を……。いきなり相棒の姿が消えたと思ったら脚をやられていたんだ……。あんなの忘れられるわけがねえ、4本足の化け物を、あざ笑うかのようなあの顔を……。！」

しかし、妙だな。今まではいなくなった人の影すらも分からなか

ったのにどうして生き残りがでたのだろうか。

「いままでの件はそいつがやっていたのか!？」

「闇夜の化け物をどうにかしないと俺たちはこのまま食い殺されちまう!そんなのは嫌だ!」

「こうなったらみんな武器をもって倒すしかないべさ!」

「くそつ、次現れたらしとめてやる!来るなら俺のところに来いってんだ!」

「こうなつた以上、だまっぺられねえ。こつちから打って出るべきだ!」

こんな会話が聞こえてくるまでに人間はおいこまれているようだ。まあ、無理もないだろう。人間にとって死は特別なようだからな。

妖精はひどくやられても、また別の妖精として再構成される。ただ、人格や性格が変わってしまうため、それが一つの死を意味するのもかもしれない。あまりいい気分ではないが雰囲気似た新しい妖精が生まれるため、新しい仲間ができたと祝福するのが一般的だ。私もそれなりに長く生きていたため、別れの経験は結構ある。慣れることはできないが自然の営みとして享受はしている。しかし、このような感性は人間に結構影響されているのかもしれない。長いこと人間を見てきた影響だろうか。

では人間はどう感じているのか。人間にとって死は絶対的な終わりであり恐怖の対象として見られている節がある。葬儀という儀式があることから個人というものに強い執着を感じさせる。他の動物とくらべて身体能力が劣っている分、助け合って生きているため、個に対する感じ方が大分違うかもしれない。

「これは、今晚にも森に乗り込むような雰囲気だな」

「ついに真相を解明する時が……!でも、少し怖いなあ」

「危険を冒さずして新しい発見はありませんよ、ウインクル。それ

に怖いことは悪くありません。みんないることですし頑張りまじょう?。」

「本当にいくの……?。」

「だいじょーぶだいじょーぶ。みんないれば暗い夜道も怖くないよ。」

「前から決めていたことだ。いい加減腹をくくるとしよう。」

さて、いったい何が出るのやら。楽しみだが怖くもあるな。さあ、次の月の無い夜まで待つとしよう。

ついに、人間が森に乗り込む時がやってきた。尾行の準備は万端だ。

「ねえ、瑪瑙ちゃん。なんで大きめの布なんて持っていくの?それも数種類。」

「安心するがいい。私はかくれんぼの達人だ。」

「それ、説明になっていない気がするんだけど……。」

「さて、漫才もそのあたりにしておきなさい。見失いますよ?。」

「それもそうだな。」

人間たちは松明と武器を持ち、森の中を進んでいる。どうやら最初に人がいなくなった場所に向かっていているらしい。

「かなり奥まで来たのにまだいくのでしょうか。」

「結構あるいてますねえ。帰りのことを考えているのでしょうか。」

「どうやらしるしをつけながら進んでいるようだ。人間の工夫は面白い。」

「何も起きないね。」



「これで出てこなかったらどうしようかなあ」

その時、急に森からすべての音がなくなった。先ほどまでわずかに聞こえていた風の音もぴたりとやむ。森を包み込む不気味さが一層と増した。人間たちの中に、そして私たちの中にも緊張が走る。

「おい、なんかおかしくないかっ？」

「ああ、皆のもの、油断するな！周囲を警戒しろ！」

「出てくるなら出てきやがれ！返り討ちにしてやる……！」

どよめきつつも人間たちは既に臨戦態勢、わずかな音をも逃さない勢いだ。仲間の仇といいながら殺気立っている。

「なんだか、いやな感じが、止まらないのですよ。正直、立っているのが、やっとです」

「アルネム、大丈夫？私も一緒にいるから頑張ろう！」

こんな時にこそアルネムの能力だと思うのだが、恐怖で能力をうまく使えていないようだ。

「アルネム、深呼吸だ。君の能力ならどんな時でも勇気を持てる。」

「すー、はぁ、少し落ち着いたようです。瑪瑙、ウインクル、ありがとうございます」

「落ち着いたようだなにより。ん……？」

「これは、いったい……？」

どうやら梢も何かを感じ取ったようだ。私にも草むらを掻きわける音が聞こえてきた。

「あれれー、なんだか一匹じゃないみたい……。……！こつちにも何か来てるっ！」

フキが叫んだ瞬間、それは姿を現した。その体軀は私たちの数倍の大きさ、闇に溶け込むような黒い毛並み、目は赤く染まっており、その爪は触れただけで切れそうなほど鋭い。口からは鋭利な牙がのぞいている。容貌としては狼だろうか？しかし狼にしては大きすぎるし、なにより運動能力がおかしい、こんなにも高く跳躍はしなかったはずだ！

《ルオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！》

「でたぞおおおおおおおおおおお！」

「こいつが、こいつらが村のみんなをやりやがったのか！」

「落ち着け、数はそんなに多くねえべ！」

人間の方からも声が上がる。そこまで多くないようだが何匹いるのだろうか。その化け物は私めがけてその爪を振りおろしてきた。とつさに私は後ろに跳ぶ。先ほどまで私がいた場所に振りおろされた爪は私の肩をかすり大地をえぐる。

「いきなり手荒い歓迎だな……。……！」

「瑪瑙ちゃん大丈夫！？」

初撃がかすめたせいか、勢いよく血が吹き出ている。そして、いつ回り込んだのかフキが化け物めがけて突撃していた。

「瑪瑙の仇、そおい！」

「いや、私はまだ生きていますぞ」

「ギャン！」

弾丸のように放たれたあびせ蹴りは化け物の脇腹に突き刺さる。だがしかし、化け物は体が少しよろめいた程度だった。まずい、今のフキの体勢ではよけきれないぞ！

「グルアアアアアア」

「ぎゃん！」

「フキ！」

フキが一撃をもらって弾き飛ばされた。鈍い音が聞こえたうえに、動きが見えない。嫌な予感がする。ぐずぐずしてはられないな。すぐさま私たちは一斉に飛びだした。梢が叫ぶ。

「私が隙をつくります！みんなはフキを！」

「流石に一人じゃきついだろう、私も足止めをする！」

「わかったよ！」頼みます！」

化け物は向かってくる私たちに向きなおり、飛びかかってきた。どうやら私たちも撃ち落とす気のようにだ。すると、先頭を行く梢が手を後ろに回して合図を出す。手を握って開くこのサインは土合戦の時によくつかわれる散開の合図。この作戦は私たちの十八番、おそらくみんなにも伝わっただろう。

「今です！」

化け物の手が振りあがった時、梢の声が響いた。瞬く間に、皆がちりぢりになる。化け物の目が見開かれる。突然の動きの変化に驚いたようだ。腕の動きが少し鈍り、間一髪で梢がかわす。見事なスウェーだ。すかさず私は化け物の手がめり込んだ地面を固める。こうなればしばらくその腕は動かさまい。

「いい援護です。瑪瑙」

「なに、仲間のためだ。お安い御用さ」

そして、あたり一面に光が炸裂した。

「ルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！」

梢の『照らす程度の能力』だ。片腕を封じられた、化け物はまともに見光をくらい、のたうちまわっている。

「フキは確保したよ！」「どうやら気を失っているだけのようです」

無事、フキの確保もできたらしい。怪我はひどくないようだ。

「それは重畳。今のうちに離脱しよう」

「ええ、それがよさそうです。倒す手はなさそうですしね」

フキの渾身の蹴りでようやくぐらつくような相手なのだ、勝ち目などない。それに逃げるにおいては今しかない。

私たちは一目散に逃げ出した。こんなことはもうこりこりだね。

ああ、早く止血しないと。

妖精たちが、後に妖怪と言われる存在と出会った夜は幕をおろした。後日、人間たちは宴会を開いていた、そこには打ち取られた3匹の化け狼が横たわっていた。だが、これで終わることはないのだろう。あのような存在がいたということは、これから先も生まれってくるのだから。

くオマケ 考えさせられた日の昼下がり

「結局あれはなんだったんだろうねえ。怖かったあ……」

「うー、頭がぐらぐらするのですー。瑪瑙もこんな感じだったんですねー……」

「ん？よくある昼間のタツクル程度じゃ何も支障はないぞ？」

（（そうだ、記憶飛んでるんだった。危ない危ない……）（）

「そっかー、あははははー」

「でも、大事には至らなくてよかったですよー」

「まったくですね。しかし、今回だけでも言い切れません。これからのことを少し考えた方がいいかもしれませぬ」

「考えるのいやー！」

「そうはいかないと思うから諦めるんだ」

そんな、ある日の昼下がりでしたとさ。

三日目：闇夜の晩、みんなで行けば怖くない。そんなことはなかった。

（後書き

ついに妖怪（？）がでましたが、構成を練っていた当初とだいぶかわってしまいました（・・・）

本当は出会って少し雑談するor妖怪と人間の戦いを見る程度だったのに、いつのまにか瑪瑙たちが巻き込まれていました。いつもよりシリアスっぽくなった気がします。よく、他の作者さんが「いつのまにか話の筋が変わっていた」とか「キャラクターたちが勝手に動いてくれました」とおっしゃっていることが少しわかった気がします。

さて、今回でてきた妖怪狼さんですが、次のような経緯で生まれました。

月のない夜に人が消えた。初めて消えた日に月が出ていなかったのは偶然。

この現象が何度も起きる。月のない夜の失踪が生んだ恐怖が影響。何が起きているか分からないという恐怖が生まれる。

何かに襲われたのではないかという噂が立つ。

襲う生き物＝狼？（この地域では狼ぐらいだった）ここで原型が生まれる

なぜか爪痕が残っていた。

より狼が凶暴化。

ついに人里にやってくる

無理やりな気もするけどそんなこんなで凶暴な狼さんが生まれ、その場に居合わせた妖精たちもまきこまれてしまったようです。初めての戦闘描写もあり、いろいろと挑戦した回になりました。これはおかしいんじゃない？ということがあれば、遠慮なく突っ込んでもらえたらと思います。

P . S .

書いているうちにどんどん妖精たちがブラックストマックになってきている。どうしてこうなった。

#### 四日目：何事もほどほどが一番、だよな？

そこは木々がまばらに生えている森の中、普段はせいぜい妖精が数匹飛んでいる程度の静かな場所である。別段、草木が生い茂っているような場所でもなく、ところどころ地面が見える程度に落ち葉が降り積もっている。

はたから見ればただ木が生えているだけで何も無い寂れた森であろうこの場所なのだが、この日はなぜかピリピリとした空気が流れていた。そして、森の中にそびえる大きな木。その陰で幹に背を預け、一匹の妖精が隠れていた。短めで跳ね気味の栗色をした髪、白く透き通った羽をもつその妖精の額には汗がにじんでいる。体の前のボタンで留められている白い長袖のシャツに、灰色の袖のないチエック柄のベストは土でところどころ汚れてしまっている。しつかりと見開かれた目からのぞくこげ茶色瞳は背を向けた方向を見ようとしているようだ。口元は閉じられているが微妙に釣りあがっており、この状況を楽しんでいるように見える。そして、それに応えるかのように胸元のリボンであしらわれた瑪瑙のブローチが淡く輝いている。

目線の先を見ようとしたのだろうか。木の陰から栗色の髪の妖精が頭を出した瞬間、飛び出た顔めがけて土の球が飛んでくる。しかし、予想していたのかその妖精は再び顔をひっこめ、飛来した物体を避けた。眉間にしわを寄せ真剣な表情をしているが、やはり口元には笑みが浮かんでいる。

「ふむ、なかなか警戒が厳しいな。一筋縄に行けそうにない。それでこそ突破のし甲斐があるというものだ」

そうつぶやくと栗色の妖精は右腕を前に突き出し、ひらいていた手を握る。すると地面から複数の土の球が作られ、宙に浮き始めた。



ちょうど妖精の顔の高さで静止したそれを満足げな顔で一瞥ししつつ、その妖精はその右腕をちょうど肩と水平になる位置まで振りぬく。ふわふわと中に静止していた球は急激に動きを変えた。その光景を一言で表せば一斉掃射、先ほどのお返しと言わんばかりに、攻撃のあつた方向めがけて撃ちだされている。

「げえッ、姿が見えないのに撃ち返してきたぞ！それもたくさん！」「なんだとッ、こんなことをしてくる奴なんて一人しかない！」

「くそう、あの面子は予選で三人に減っているとはいえ。私たち二人じゃ部が悪いぞ！」

「退却したいのはやまやまだけど、こんな状況だと動けないよ！」「でも、早くしないと増援が来ちゃうよ！」

球の向かう先から二匹の妖精の声が聞こえてくる。なるほど、現状は是一对二であるらしい。だが、そんな人数差など関係ないことは誰の目からでも明らかだろう。それほどまでに土の弾幕は厚いのだ。

「なるほど、それはよかった。だがいつまでも話していて大丈夫かな？」

「えっ？」「ほえっ？」

いきなり頭上から声を掛けられた二匹の妖精は間が抜けた声を発し、顔をあげる。刹那、二匹の視界は闇に染まった。その目が暗くなる前に、純白の羽をもつ栗色の髪の妖精が見えたと後に語っている。そして、その顔はとても楽しそうに歪んでいたと。

「二人とも被弾確認だ。残念だがここで脱落してもらおうか。」

「む、無念……」

「くそう、大地の妖精は化け物か……。流石は一人一個分隊の瑪瑙

……ガクッ」

そして、畏怖の念を向けられた栗色の髪の妖精は赤茶色のスカートを翻し、その場を後にした。

現在私は森の中にいる。この日のために磨きをかけた能力を存分にふるいつつ、警戒しながら周囲をうかがいつつ森を進んでいる。何を隠そう、今日は『第23回サバイバル士大戦』とザ・バトルロイヤル』、妖精たちの仁義なき戦いが繰り広げられているのだ。ここはまさに無法地帯、手を組むのもよし、奇襲よし、罠を仕掛けようが能力を行使しようがお構いなし。フィールドからでない限り何でもありだ。『サバイバル士大戦』とザ・バトルロイヤル』の構成は予選と本戦の二つ。予選は三つの組に分けて行われ、本戦は残った妖精全員でのサバイバルゲームだ。とにかく生き残った者が勝ちである。試合は審判が終了の合図を出すまで続けられるため、終始気を抜けない。

「流石に本戦となるとなかなか相手が見つからないな。慎重に進むとしよう」

さきほど二人組を倒したがなかなかの射撃精度だった。二人だから力技で押し込めたがもつと数がいたら危なかったな。現在私は9大会連続生存、この試合を生き残ればついに二桁の舞台だ。負けられん。

「さて、ウインクルとフキはどこまで飛んでいったのやら。いい加減合流したいのだが……。落とされてないだろうな」

「呼んだー？」

「ほわあああい!？」

完全に意識の外だったせいか、思わず変な声をあげてしまった…。いきなり後ろから抱きついてくるのはあいつしかいない。

「フキよ、抱きつくのは構わないが、せめて前から来てくれないか？」

「ふふー、前からだとよく見えないもん! 瑪瑙の羽はきれいなのですよー。」

「しかしだな、こんな状況下だと心臓に悪い。声くらいは掛けておくれ」

「あはははー。瑪瑙はウインクル知らないー?」

「む、一緒にいたんじゃないのかい?」

「陽動はうちにまかせろー! って叫びながらどこかにいつちゃったの」

「……それは陽動と言えるのか?」

「ウインクルらしいのです」

どうやらいつものパターンらしい。自分から陽動と叫んでいては意味がないだろうが。しかし、それを逆手にとって近くに潜んでいると警戒させられれば使えないこともないか。撃ち落とされていいことを祈ろう。

「まあいい、二人いれば戦えないこともない。早速、索敵を始めようか」

「お、はっけーん。そいやっさ!」

いきなりフキが明後日の方向に土の球をなげる。しばらくすると叫び声が聞こえた。

「ぎゃー！やられたー！」

「え、どこから飛んできたの!？」

「まさか、これが噂に聞く『風の女王』か!？なんつー狙撃力だ」

「とにかく隠れるよ！」

「うー、今日こそ生き残れると思ったのに……」

悔しそうにぼやきながら被弾した妖精はフィールドの外に出ていく。話し声から相手は四名だったようだ。先制攻撃で一名おとせたのはとても大きい。ちなみにサバイバル土大戦において、妖精たちの間でフキは『風の女王』と呼ばれている。さきほど見せた狙撃だけでも十分におかしいのだが、それだけでは『女王』と呼ぶには至らない。フキの一番恐ろしいところは他にある。

「あははははー。見つけた！」

「うわ、突っ込んできたよ！」

「まだあわてる時間じゃない、相手は一人だ。集中砲火で押しつぶせ！」

「さっきの狙撃はびっくりしたけど、ぼくたち三人に正面から挑むとは笑止！」

ああ、その台詞はいかん、実にいかんぞ。後で立ち直れなくなる。しかし、言うだけはある。むしろ、称賛に値するほどの連携技だ。あつという間に三方向から取り囲んで一人は直接、一人は避けた先を狙い、もう一人は状況に応じて狙いを変えている。あの連携に一人で挑めば瞬く間にやられてしまうだろう。だが相手が悪いとしか言いようがない。

「きゃー。いっぱい飛んでくるのですよー」

「あれ、あれ、なんで当たらないの!？」

「嘘だ、こっちは完全に死角のはずだよ！」

「ええい、弹幕だ、弹幕が足りんのだ！」

三人組の回転率がさらに上がる。それは集中砲火など生ぬるい。もはや土の爆撃と言っていないだろう。だがそれでも届かないのだ。風のように舞う風精には届かない。それは宙に舞うひとひらの羽、暴風をたたきつけられようが地に落ちることはないのだ。

「きゃははははは！楽しいね！アハハハハハハハハハハハ」

「いつたいなんなの……。こんなの避けきれるはずがないのに！」  
「嘘だ、こんなことありえない、ありえないよー！ー！」

「おかしい、なぜあたらぬ！まで、そういえば攻撃してこないぞ。そういえば噂には続きがあったような……。まさか」

フキは置いておいて、一人の様子がおかしい、こちらの狙いに感づいたか？だがもう遅い、仕込みは十分、あとは結果をご覧あれ！

「実力は申し分ないが周りへの警戒が手薄だったな！落ちるがいい！」

口上を述べ、高く掲げた右腕を振り下ろす。能力の大盤振る舞いだ、受け取るがいい！

襲いかかるは四方八方からの一斉射撃、これを避けられる者はあまりいない。

「ぎゃああああああ」

「理不尽すぎるうっうっうっうっ」

「聞いたことがある、風の女王は単体でも恐ろしいが、真に恐ろしいのは」

「アハハツ、私は風になる！」

放たれた射撃は、フキもろとも妖精たちを飲み込んだ。爆心地からは勢いよく土煙が立ち上っている。十中八九、生還はできないだろう。だんだん目の前の土煙が晴れてきた。そこには土に埋もれた三対の羽がのぞいている。ミッションコンプリート、目の前の相手は殲滅した。そして私の目の前に、大樹の葉のように大きく夕焼けを思わせるような赤い羽をはためかせた妖精が降り立った。着ているレモン色の丈長のワンピースと橙色のカーディガンにはほこりすらついていない。

「ふふふー。とても楽しかったのですよー。流石瑪瑙なのです！」  
「いつ見ても思うが、ある程度の隙間があるとはいえなぜ避けられるんだい？」

「風さんが教えてくれるのですよー」

『流れる程度の能力』か。その名前から考えるに風の流れと一体化して球の隙間を縫うように飛んでいるのだろうか。言うなら簡単だが、そんなことできたものではない。たとえ軌道が分かっただとしてもかわしきるだけの速さと判断力が必要だ。風の妖精だからできる芸当なのだろう。

「それにしても派手にやりすぎたな。ここに留まるのもまずい」

「あらまー、もう遅いようなのですよー」

「なに？」

あたりを注意深く探ってみる。すると、耳を澄ませば、ガサ、ガサガサツ、と木の葉のすれる音がたくさん聞こえてきた。

「どうやら油断していたのは私たちのようだったな。おそらく数人どころではないぞ」

「むー、これはきつそうなのですよー」

その時、そこに元気な声が響きわたった。

「フキ、瑪瑙、ついに追い詰めたよ！今日こそぼっこぼこにしてあげる！」

「相手は二人とはいえ初代撃墜王の瑪瑙さん、それに加え現在まで無被弾のフキさんの豪華ラインナップ。油断は禁物よ」

「みんな、いつくよー！」

《わああああああああああああああ》

おい、明らかに戦力過剰でしょう！？徒党を組むにしても限度があるだろうがああああああああ！ぐるりと見渡せばそこにいるのは妖精、妖精、妖精の群れである。いつのまにこれだけ集ったのだろうか。恐ろしい統率力だな。

「熱烈な歓迎をありがとうと言いたいところだが、少々多すぎやしませんかねえ……？」

「わーお……」

しかも、こちらの胸中などおかまいなしに攻撃してくる。四方八方から飛んでくる球を撃ち落とすが、なんだこの数は。木を背負えばある程度方向を制限できるとはいえ、弾幕の密度が上がるからやっつけられない。だが見えないよりはましだ。

「この場にいるのは今度こそあなたたちに一矢報いようとした者たちさ。さあ、おとなしく落ちるがいいわああああああ！」

「ええい、すこしは自重しろ！」

「その言葉、あなたたちにそっくり返します！だいたい前回10人で困んでも被弾しなかったフキさんがおかしいのです！」

「日向ぼっこパワーなのだ！」

「いや、日向ぼつこでどうにかなるなら苦労しないのだが」

相方の実力がどんどんおかしくなっている気がする。10人以上に囲まれても被弾しないとはいったいどういうことだ？想像できない。とりあえず、今はおいておこう。現状は防戦一方で戦況はとも敵しい。気を抜けば撃ちこぼしそうだ。ひとつでも撃ちこぼせばそれでゲームセット、ここから動いた瞬間が最後。背後の木がなくなればこれだけの数だ、死角をカバーできずにやられるだろう。

「くそー、フキを狙っててもらちが明かない。瑪瑙から落とすよ！」  
「丁重にお断りさせていただく……！」

どうやらフキは相変わらずのようだ。さっきも見たがなぜ避けられるかが信じられん。だが、これ以上増えるとなるとまずいな、さはききれそうにない。終了の合図はまだかッ！

「フキまでとは言えないけどこの人数の投げる球を落とすあんたも規格外だわ……」

「今回生き残れば初の連続生還記録二桁だからな！やすやすとは落ちてはやらんぞ！」

「ハッハー！土合戦は地獄だぜええええ！これで落ちるがいいわ！」

「な、これは!？」

直角に曲がっただと!？よくみるとあいつはよく本戦まで残っている風の妖精じゃないか。たしか能力は『風を生む程度の能力』。すっかり頭から抜けていたな……。

ほどなくしてガスンと側頭部から音が響く。どうやらさっきの一発は別の球を迎撃する一撃を狙ったようだ。これで私も被弾、二桁の大台はまた今度だな、ああ残念だ、実に残念だ。



「よっしやあああああああ！瑪瑙うちとつたり！」

「ふむ、してやられたな……。あそこで急に軌道を変えるとは思いませんかったよ」

「まー、相打ちだったけどなー。」

「次はもつとうまく立ち回るとしよう。さて、敗者はさっさと去ろうかね。」

「ラジャー、これでようやく一矢報いれたことだし次は勝ちをもぎ取ってやるんだからな！」

「期待しないで待っておこう」

他愛のない会話をしながらやりきった顔をした数匹の妖精たちはその場を後にする。瑪瑙をおとした妖精たちは一矢報いることができたが大地の妖精の認識をあらためた。「こいつの力は一個分隊じゃない一個小隊だ」と。

森の中のまた別の場所。ここには脱落した妖精たちが集まっている。中には派手に被弾した妖精もいたようで手当てを受けている者もいる。

「あ、瑪瑙ちゃんもやられてしまいましたか」

のびているウインクルの手当てをしながらアルネムが声を掛けてきた。どうやらぼっこぼこにやられたようである。あの軍団にでも狙われたのだろうか？今日はアルネムの頭上に『日の妖精』が乗っかっている。

「ああ、こいつにしてやられて……。迎撃の一撃を迎撃するとは

思いもしなかったよ」

「ぼくもやられたけどね！あの状況で何人か道連れにされたよ」

「瑪瑙ちゃんを倒すとは、ネルピーちゃんたちもすごいですねえ」

「ひとりじゃ絶対勝てないけどね。数でおしつっ、不意打ちでやっ  
とだったよう。」

「うんうん」「まっただね」「能力うらやましい」

おまえら、寸分のずれもなくうなずくんじゃない。こちらとしてはあの統率力の方がよほど恐ろしい。さっきもだったが、いくらたくさん人数がいるからとはいえ人数が増えるほど連携は難しくなる。そのはずなのにこいつらはその節が見えない。いつまでたつても弾幕の切れ目が全く見えないほどの巧さである。さしずめ訓練されたベテラン戦士軍団といったところか。ただ強いだけの一人よりも脅威は上であろう。

「あ、瑪瑙が被弾したらしいぞ」

「なんてこつたい、予想が外れた！」

「ふっふっふ、今回の掛けはアタイが総取りや！」

「うっ、さようなら私の野草コレクション……」

「お、なかなかいける」

「私の努力の結晶を目の前で食べるなコンチクショウ！」

「つぎは『風の女王』だな！はったはった！」

「だいたい残りの時間は三分一か……。集中砲火受けてるらしいし  
どうなるかな」

どうやら私は賭け事の対象だったらしい。けっこう高く評価してくれていてちよつとうれしかったのは内緒だ。この調子で彫像群も評価してくれるとなおうれしい。

さて、終了までまだ時間があるようだから気長に終わりを待つとしよっ。

くおまけ 風の女王のその後

瑪瑙が退場した後、そこではさらに熾烈な戦いが繰り広げられていた。いや、それは戦いと呼べるものではないかもしれない。なぜなら

「まだまだまだ！あはっ、アハハハハハハハ！」

「みんな、くじけるんじゃないよ！あきらめたらそこで終了だ！挑み続けることに意味がある！」

「毎度のことながらあたる気がしないわね……。」

一匹はひたすら避け続け、大勢は力の限り弾幕を張り続けているというある意味一方的な状態になっているからだ。

「痛手は受けたけど瑪瑙は撃退したとのこと。そろそろ合いじゃない？」

「よし、みんな！これよりプランBに移行するッ！」

《サー、イエッサー！》

掛け声とともに妖精たちが散開する。さっきまではただ単に周囲を囲んでいただけが今度は横一列に数名がならび、三方向からにらみを利かせている。

「わあ、なにになに？次は何をしてくれるの？はやくしてよ、はやくはやくはやく！待ちきれないよぉ！」

「普段はおっとりしてるのに、ここまで豹変するのはいつまでたっても慣れないわね……。」

「こちらチーム、準備完了!」

「こちらチーム、同じく準備完了」

「こちらチーム、いつでもいけるよ!」

「なに、フキも真剣なだけだろう。はなてええええええ!」

命令が入るやいなや、さきほどとは違う弾幕が形成される。さっきまでの弾幕は点の弾幕、ただのばら蒔き弾である。それに対して現在形成されている弾幕はすり抜ける隙間がないような面での弾幕である。最初の弾幕より飛び交う量は減るかもしれない。だがしかし、すきまを縫って飛ぶことはできないため大きく動いて避けなければならぬ。

「すごいすごい!楽しいね!でもまだ足りないの、もっとだよおおおお!」

「くそつ、これをもよけるか!」

「うるたえるな!こんなこと想定範囲内だよ!ここからプランBの本領さね」

面での弾幕を避けている風の妖精に、今度は頭上から雨あられのごとく土の球が襲いかかる。一人を落とすためには過剰な弾幕、オーバーキルにもほどがあると誰しもが思うだろう。

「怖いなあ、怖いなあ!でも、わくわくするのが止まらない。こんな気分ははじめて!今日のあたしはどこまでも飛んでいけるよ、キヤハハハハハハハハハハ!」

規格外の妖精ただ一人のために用意されたやりすぎと思える弾幕だが、相手にするは生き残るといふ険しい道の頂点に君臨する妖精風の女王。その様子はまさしく捉えられぬ風のごとし、避けられないように見える球ですらも間髪でかわしている。

「まさか、ここまでとは……。考えすぎと思つてたのにまだたりないなんて嘘だ！」

「チクシヨウ、なぜだああああああああ」

さらに事態は変わる。いままでは間一髪ながらもたしかに動いて避けていた風の妖精だったが様子がおかしい。

「もう少しでなにかつかめそうな気がする、あと少し……うふうふう」

「ひるむな、投げつつける！」

妖精たちに何とも言えない恐怖が生まれる。

「見えた、『流れを生み出す程度の能力』」

そして、新たな伝説『風の女帝』が生まれた。『第23回サバイバル土大戦 くザ・バトルロイヤル』、生存者一名である。

四日目：何事もほどほどが一番、だよな？（後書き）

今回はサバイバル土合戦な回です。深夜のテンションで書いてた  
らよくわからない文章になってしまいました。フキちゃんがびゅん  
びゅん避けまくるだけのつもりだったはずが、なんかルナティック  
風精さんが降臨なさっていました。おかしいな。

次回からすこし物語が動き出します。頑張って書いていこう。

五日目：食い物の恨みは恐ろしい、主食でないほどにだ

現在私の目の前では凄惨たる光景が繰り広げられている。

「よーし、いつくよー。そおおれっ！」

ボキッ、と何かをへし折る音が聞こえる。そして、ブンッ、と風を切る音が響く。

しばらくの後、ズドム、と重たいものが地面に突き刺さる音が耳に届く。

「おー、さすがフキだ。遠くまで飛んでいくねえ」

「ふっふー、新記録なのですよー。もっと遠くを目指すのです！」

「ぼくも負けてられないね！」

「結構堅いよー」

再びミシリと『何か』をへし折ろうとする音が聞こえてくる。それも複数だ。

「一つ聞かせてもらおう。君たちは私に何か恨みでもあるのかね？」

「え？瑪瑙はとても大好きだよ？」

「しいて言えばいい加減勝負に勝ちたいなあ。いまだに相打ちがベストだよ」

「訊き方が悪かったみたいだな。なぜ私が作った彫像をへし折っては投げるんだい？しかも風の妖精総出でだ」

先ほどまでここには私の丹精込めて作った作品たちが所狭しと並んでいたはずだ。しかしだ。風の妖精たちがやってきたと思ったらなんとということでしょう、あたり一面に立っていた彫像群が今では





「調子に乗り過ぎ だばっ」

「メディー………ッ！お前のことは忘れない！」

「ああ、私ももうダメ きゅう………」

ズドオ、ズドオと大地に音が鳴り響く。私の彫像はまだまだあるぞ。

「きゃー、今日の瑪瑙はいつもより激しいのー。おっと危ない」

「フキ、君は余裕そうだけどぼくたちはいっぱいいっぱいなんだけど！煽りすぎだってばあ！」

「フキさん、ネルピーさん、すでに半数が飲み込まれました！瑪瑙さんはまだ治まりませ ぎゃーす！」

「シルビアアアアアア！くそう、ペース上げ過ぎたよう！」

ふふふ、私のコレクションをぶち壊しておいて反省も何もないよ  
うだな。

「ああ、まだしゃべる余裕があるようだな。そんな君たちに感謝を  
こめてプレゼントだ」

「あはははー、ぜひともお断りしたいですー」

「え、ちょっと、こんなプレゼントなんて聞いてな ー」

あ、自分で作品壊してーら。

自棄になった叫び声とともに、大地が妖精たちを飲み込んだ。

「さて、何かいい残したことはあるか？」

「うー、流石に隙間が全くないと避けられないのですよー」

「まあ、瑪瑙。すこしはすっきりしたからいいんじゃない？」

今、私の前には風精たちの首が生えている地面と何もなくなった空  
き地が広がっている。

「ほう、よほど命が惜しくないようだな」

「最近瑪瑙は引き籠り過ぎなのですよー。少しは気分転換するのだ  
！」

「アルネムと梢に頼まれたんだよう。瑪瑙を引っぱり出してこいっ  
て」

「む、そうか？」

引き籠っていたのには訳がある。最近私はよくわからないが体が  
重い。体の内に何かもやもやしたものを感じている。何かやっつい  
れば解消されるかと思いい彫像を作っていたのだがあまり効果はな  
かった。彫像の出来栄えはよかったけどな。

「して、彫像を破壊する必要はあったのか？」

「ふっふー、瑪瑙が本気になるのは彫像くらいなのです！」

「確信犯ですかそうですか」

まあいい、久々に別のことをするでしょう。まずはアルネム達のと  
ころに行こうかな。

「何はともあれ、ミッション完了ですよー」

「それはいいとしてぼくたちはいつまで埋まっていればいいんだい」

「それはねー、そおい！って気合入れれば抜けるよー！」

「訳が分からないよう。なんで抜けられるんだ！」

まだ日は昇り始めたばかりだ。

現在、私はいつものメンバーで集まっている。

「瑪瑙をやつと引つ張り出せたのですよー」

「なんだと！フキ、いい仕事だ！」

確かに集まるのは久しぶりだがこの反応は少し大袈裟じゃないか？  
うおっ、いきなりお腹に衝撃がッ！

「うえぽッ」

地面に押し倒された私の視界にウェーブのかかった淡い金色の髪が見える。

「瑪瑙ちゃん！ここ最近、声かけても空返事だったから心配したのですよ！」

「ええと、アルネム？」

「その間抜け顔は私がどれだけ心配したか分かってないのです！大  
体ですね、私が声かけても『ああ』とか『うん』とか『そうだね』  
って全く話を聞いていないことが明らかかな返事だし、私の能力掛け  
ても全然効果がないし、その上ぶつぶつ何かをつぶやきながら彫像  
を作つてばつかだったのですよ！わかつてますか？わかつてません  
ね！」

「落ち着くんだアルネム」

「口答えするんじゃないです！しかもですよ、それが1日だけかと思  
いきや何日も何日も同じ状態でこちらがいくら話しかけても反応  
なし、精神がやられたかと思えない異常っぷり、叩いて引き戻  
そうにもなぜか固めた土で防御するわで大変だったんですよ！ああ、  
まだ言い足りないのです！」

アルネムが本気で怒ってる。いまだかつてここまで怒っていたことはあつただろうか。いや、ないな。どうしようどうしよう。しかも話を聞いていると近頃の私はなんだか不気味な妖精その一になっていたようじゃないか。全然自覚がないぞ。おまけにアルネムのお話は終わる気配が見えない。

「あらあら、私の言いたいことはアルネムが大体いつてくれそうです。すね。しばらくはアルネムに任せましょう」

「心配掛けたのは申し訳ないと思うが、こっちの」

「口答えするんじゃないです！」

「あつはつは、こつてりしばらくはな！うちの分は勘弁してあげるからさ」

ウインクル、君も私を見捨てるのだね。ああ、無情……。

「四面……楚」

「話をそらすんじゃないです！」

まずい、まずいまずいまずいまずいまずいまずいまずいまずいまずいまずい

このままでは精神的地獄に落とされかねん。なんとかして逃げないじ。

「戦略的撤退だ！」

「え、きゃっ！瑪瑙ちゃんこのやるおおおおおおお！まっつったく反省してませんね！」

「精神的地獄には落ちたくないのだよ！」

急な動きには対応できまい。このまま逃げきる！そんなことより

アルナムが怖い。怖いったらありやしない。

「ぶおッ」

再び私に衝撃が奔る。いきなり首が締まった感覚が……、襟がつかまれている!?

「ふふふ、だから『私たちの分』もちゃんとお話を聞きなさいと言ったでしょう」

「え、稍さん何をおっしゃるんだい。私はこのままでは精神的地獄に」

「はい。だから『逝って来い』と言ってるのですよ。何も分かっていないようですねえ。うふふふふ」

「メ〜ノ〜ウウ〜」

「ひいッ」

ああ、母なる大地よ。私は今日生き残れるのだろうか。山から顔を出している太陽が目にしみる……。

「今日のところはこれくらいにしておいてあげるので」

「ありがとうございますもつしませんありがとうございますもつしません……」

「そおい!」

「がっ!?!」

私の脇腹に響く、ドムツという鈍い衝撃音。とともに目が覚める。気がつけば日差しがまぶしくなっている。あれからどれだけ時間が経っただろうか。太陽が現在頭の上にも昇っていることから昼こ

るだろうか。

「また変な感じだー」

「あそこまで自分を否定されてへこまない奴はいないと思うぞ」

「否定じゃありません。注意です！」

「元気が一番ですよ。ふふふ」

「あれは注意というレベルじゃないと言わせてもらおうか」

「事の原因がなにのたまわっているんですか。反省するのです。大  
体、体調が悪いならまず私のところに来るべきだったですよ」

「暇ですよー。暇ですよー」

「こうして集まったはいいが何か面白そうなお話はないものか」

「そうだ、人里に行こうよ。また新しいものがあるかも！」

相変わらず話題がぼんぼん飛ぶものだ。さて、人里といえば近頃  
見た目がごろごろ変わっているスポットの一つである。初めのころ  
はせいぜい木造の家が建っており、柵で囲まれているような場所  
であった。しかし、ある日を境に人里を囲む柵や人間の住む家が土を  
固めたものになったかと思うと、少し前にはよくわからない材料に  
変わっていた。軽く叩いてみたがとても頑丈だった。

「人里か、最近見に行っていないな。久しぶりに行ってみるとしよ  
うか」

「よっしゃ！きまりだな！」

思い立ったがなんとやら、早速行くことにしよう。

「人里もだいぶ様変わりしたもんだねえ」

「とても高い建物が増えてますね。あれは初めてお目にかかります」

「わぁー、すごく大きいです」

「あれだけ大きいとすぐ崩れそうなものだが……」

今日もまた新しいものが増えているようだ。私たちは人の家の上に陣取っているが、新しい建物ははるか上空まで伸びている。いったい何に使うのだろうか。頻繁に人が出入りしているところから家ではないと思う。

「あははっ、さっそく突撃なのだ！」

「がってんだ！」

「あつ。フキちゃんとウインクルちゃん、待つのですよー！」

「やれやれ、もう少し落ち着きを持てばいいのですが」

「何、いつものことだろう」

そう、いつものことだ。そしてこの後起こるであることもしかり。

「おい、妖精がはいりこんでんぞ」

「なんだって？とりあえず追いついておこっぜ」

離れた位置までしっかり聞こえてくる風切り音に鈍い音が混じって聞こえてきた。

「ウインクルはやられてしまったようだな」

「そのようですね。彼女の犠牲は忘れません」

「二人とも、薄情者ですよ……」

ばれないようにこそこそと回り込む。潜入完了だ。ここの敷地は実に広いな。

「頭の上に、こぶ二つ」

「やめて、頭つつかないで！じわじわくるって！」

フキとウィンクルも無事到着。結局、迂回してきたようだ。

「最初から遠回りしてくれば良かったものを。実に馬鹿だな」

「だってまっすぐ行った方が早く着くにきまつてるでしょ！」

「私たちは早く着きますね」

「ああ、私たちは早く着くな」

「結局早く着くんでしょ？問題ないのだ！」

まあいいか。私に問題がある訳ではあるまいし。はたしてウィンクルは事実が気が付く日は来るのだろうか、今後も観察を続けよう。

「入口につきましたよ……。あれ？変なの」

いつのまにか入口にたどりついたようだ。だが、流石は新種の建物といったところか。今までとは一風違う風貌をしている。

「これは扉なのか？取っ手が見当たらないのだが」

目の前にあるのは表面がまっ平らで手を掛けるところもなければ取っ手もない、中心に割れものある壁にしか見えない。

「ほんとだ……。ほんとに扉なのかな？」

「さきほど遠目から見た時はここから出入りしていたと思うのですが……」

「ああ、ここから中に入っていた。見間違えではないはずだ。しかしどうやって開くんだ？」

「とりあえずおしてみるのだー！」

「がってんだ！」



《いつせーの、そおいやあああああ》

……びくともしないようだ。

「おしても動きそうにないなあ」

「中央で二つに分かれているから左右に引っ張るんじゃないですか？」

「それだ！」

《ネバーギブアアアアアップ！まだ頑張れる、頑張れるだろ！  
うおおおお》

……びくりとも動かないようだ。

「ぜえ、ぜえ、これでもだめなのか……」

「むー、そうだ！フキとウインクルの二人でやってるからダメなのだ！みんなやれば怖くない！」

「ふむ、試してみようか」

「腕が鳴りますね。ふふふ」

「三度目の正直ですね！」

「あはは、二度あることは三度あるー。さあみんな頑張るよー！」

「フキ、それは結局開かないってことか？」

「いつくよー！」

「無視するのか、そうかそうか」

《諦めたらそこで、試合終了おおおおおおおおおー！》

……びくりとも動かないようだ

「……開かない」

「ダメだったな」

「どうしてそこであきらめるんだよー！」

「つまんないから他のところに行きたい！」  
「もつと熱くなれよおつぶあ」

突き刺さるタツクル、悶絶するウインクル、満面の笑みのフキ。叫んでいるところにタツクルされたせい、口元がぴくぴくしている。呼吸困難なのか、抱きついたままあの顔で頬ずりされると怒るに怒れないのかは定かではない。私が思うにこの風精、実は天真爛漫じゃなくてブラックストマックじゃないのだろうか。あの笑顔に騙されてはいけない。なんにせよこのままではらちが明かないことは確かだ。

「開け方も分からないし、待とうにも人間がくる気配はない。他を回ってみるのもいいかもしれないな」

「ふふ、それもよさそうですね」

「あ、あっちが楽しそうなのだ！」

「さー、お宝探しですよ！」

「うちが一番すごいのをみつけてやる！」

今度はあっちか。確かあそこは『詰所』だったか。里を警備する人間が務めている場所だ。相変わらずフキに振り回されっぱなしだがこうして人里を回るのも悪くないな。

「詰所に入っても面白そうなものはなさそうだな……」

「あら、入ったこともないのに分かるとはすごいですね？ふふふ」

「まあ、あったとしても『妖怪』とやらに対抗するための道具程度だろうよ」

あいつらが侵入してからだいぶ経っただろうか。詰所の様子が騒がしい……。あいつら、しくじったのか？



「『おつまみ』って食べ物是人にとって大事なんだねー」

「まさか、あそこまで追ってくるとは思いもしなかった」

「まったくですね。能力で目くらまししようが気配だけで追ってきたましたし……」

「いくら逃げるための『流れ』をつくっても塞がれたのですよー」

「まさかな、人間の身長ほどの壁をつくっても『どっこいしょおやおおお』とか叫びながら一飛びで越えてくるとは思いもしなかったよ……」

「次はばれないようにうまくやらないと危険なのですよ」

「まったくだね、とりあえずこの戦利品を食べてみようよ！一つだけ持ってこれたよ！」

「よくもまあ、とって来れましたね。早速ですが頂きましょう」

「どうやらこれは肉を干したもののようだ。塩味が効いていてなかなかおいしい。次は私も協力してみよう。」

〈閑話 とある研究者の憂鬱〉

「はあ……」

私はため息をつく。時刻は現在昼を回ったころだろうか。現在は私は会議室にいる。

「だから妖怪どもはせん滅すべきだ！なぜあんなにも危険なものを野放しにする必要がある！」

「危険だからこそつかつに手を出すべきではない。それに妖怪も人

里まで攻め入ってくることはあまりない」

「その通り。もし近づいてくるようであれば追い返せばいい」

「なにを日和った事を言っている。危険の種が目の前に埋っているのだ。さっさと除去するのが一番だろう！」

この会議ほど無駄な時間はない。何せ議論は平行線なうえに、熱が入っているせいか引く気配もない。もっと理性的に考えて発言してもらいたいものね。

つまらない、と思いつと外を見るとなにやら妖精が入り込んでいるのが見えた。なにやら赤い妖精がいじられているようで、見ていて微笑ましい。どうやらこの建物に入ろうとして色々試しているところかしら。押してダメなら引いてみる、一人でダメなら数人で。発想は悪くないがその方法ではこの中にははいれない。

「時間になりましたので午前の会議を終わります」

会議の終わりを告げる声が聞こえてきた。

「ようやく退屈な時間が終わったわね」

「八意さんぶつちやけすぎですって。中身がなかったのは事実ですけど」

私の漏らした愚痴にすかさず隣から答えが返ってくる。

「あら、あなたもなかなか言うじゃない」

「あははは……。自分にはなんのことかさっぱりですね」

「はいはい、それじゃあ気晴らしに外にでも行きましょっ？こんな窮屈なところにいたら窒息してしまっわ」

「あ、それはいいですね。早速行きましょっ！」

扉を開けると爽やかな風が吹きつけてきた。やっぱり外は気持ちがいい。あんな会議をするくらいなら研究をするか、外に出て気分を入れ替える方がよっぽど有意義だ。どうやらあの妖精たちはもういないようだ。

「さーって、何かおいしいものを食べに行きましょうよ」  
「それもいいわね。あら……？」

大通りの方が騒がしいようだ。いったい何があったのだろうか。

「なんか詰所の連中が騒いでるようですよ。まったく、むさくるしいっいたらありやしない」

「……しかも必死に妖精を追いかけてるのはなぜかしら？」  
「さー？どうせくだらないことには間違いないんじゃないですかねえ」

そんな軽い気持ちで追いかけてるのを見ていたときにそれは起きた。

「んなっ!?!」  
「……っ!」

緑色の妖精が何かをしたかと思うといきなり光が炸裂した。普段はふわふわしている、いたずらしてくる、興味津々にこちらを覗いている、妖精はその程度のことしかしていない。

「この騒ぎ、最後まで見届けるわよ」  
「え……。もしかして追いかけるつもりですか？」  
「当たり前じゃない。さっさといくわよ」

「いや、私は何の変哲もない研究者ですから　　っでもう行ってるし！ああもう、なんである人は研究者なのにそこらの警備兵より体力あるんですかっ！」

……まあ、お仕置きは勘弁しておいてあげようかしら。それにしても妖精というものの認識を改めた方がよさそうね。今度は地面を隆起させる、か。本当にいろいろできるのね。調べ甲斐があるわ。

そんな昼下がりの裏のーコマ

五日目：食い物の恨みは恐ろしい、主食でないほどにだ（後書き）

さて、最後に書いたのが1月の29日か……。遅いつてレベルじやねえぞ！2月は学業の方で缶詰め、3月に入って最初は何もしない、そろそろ動こうかと思ったときに大地震とてんやわんやな最近です。幸い私の住んでいるところには被害はなく、被災地の友人や家族の無事も確認できて一安心です。

さて、小説の方ですが『プロットが穴だらけ過ぎて修正せざるを得ない』という事態になりました。時間が空いてから前の話を見ると「おい、読みにくいぞ」と自分で突っ込む始末。思考錯誤しながらいい作品に上げていきたいものです。特に括弧の使い分けとかがここまで難しいとは思わなかった……。複数人がしゃべるところを今は《》にしていたり、「」にしていますが、ぴんとこなかつたりと悩みどころです。

さて、いままでオマケとしてきたところを閑話に変えてみました。なんでかつて？長さやネタ的におまけじゃねーよ！って思ってきたからだあああああああ！

後書きがよくわからないことになってますがここまで読んでくださった方に感謝です（・・・）



## 六日目：料理人に私はなる！

「昔の文献もばかにできないわね。『豊穰をつかさどる自然の精霊』というのもあながち間違えじゃないといったところかしら」

「実に大袈裟な表現だな。せいぜい『いたずら好きな自然の精霊』だったと思うのだが」

「そのことも文献に書いてあるわね。なんでも罨を仕掛けるのがうまいとか。そのおかげでとある時期の道具の発展がすごかったらしいわ」

「へー、よく分かんないけどどちらが頑張れば楽しいことになるってことかな？」

最近、私達とはある人間の女性と話をしている。なんでも妖精のことを調べているらしい。物好きなことだ。ちなみに、この人間の名前は『八意 永琳』、研究者というものらしい。

「妖精がどのように見られているのかを聞くのも新鮮なのです」

「ふんふんふーん。えーりんのお話はややこしいのだー。瑪瑙がふたりいるのだー」

「うちは瑪瑙と梢を足していやなところだけを残した感じだと思っ  
なあ」

「ウインクル、ぜひとも詳しく聞きたいところですねえ……。ちょ

つとあちらへ行きましょうか」

「はっ、これは命の危機だっ！おさらば　ぐえっ」

「さあ、心行くまでお話ししましょうね？みなさん、ちょっと席を  
はずしますね」

「ぎゃー！やめて！まだ永琳からおやつもらってないのに！それと  
さっきのは褒め言葉だから！」

「へえ、褒め言葉ですか。どのあたりがよかったのかぜひとも教え

ていただきたいものですなえ」

「梢さん梢さん、目が笑ってませんよ。口だけ笑ってますよ。ちょっとこわいんですけど！助けてアルネムー！フキー！」

「おや、瑪瑙には助けを求めないのですか？」

「瑪瑙に助けを求めたら状況が悪化するにきまつてるでしょ」

「……。梢、私の分も頼む。それとウインクル。今日のおやつは一人分少ないそうだ」

「は、謀ったな！この腹黒コンビ！」

「さて、瑪瑙にも応援されていることですし、じっくりいきまじょう」

そして、ウインクルは梢にひきずられていった。これではらく再起不能になる。君の分のおかしは無駄にはしないよ。

「あらあら、あなた達はとても仲がいいのね。見てて微笑ましいわ」

「この光景を初見でさらりと流せる永琳が恐ろしいのですよ……」

「類はともをー引き寄せるー」

「まったく動じないあなた達も相当なものじゃないかしら？」

「なに、いつものことだ。問題ない」

「まあ、ウインクルちゃんなので」

「あはははー、火ーの中に油を注ぐ、ういんくるー」

「……妖精の認識を改めた方がよさそうね」

「そんなことよりもおかしを要求する！」

「はいはい、あせらない。今日はきびだんごをもってきたわ」

「ふむ、それでは早速いただく」

一つ掴んで口に放りこむ。

「じ、これは……!?!？」

その時私に衝撃が走る。私はこれまで野草に草花、木の実や鉾物などあらゆるものを食べてきた。だがこの『きびだんご』は今まで食べてきた物では感じたことのない柔らかかなのに弾力のある触感、そしてこの口の中に広がるほのかな甘味、一言で表わすなら未知との遭遇、久しく感じていなかった懐かしの感覚が隅々までいきわたる。

「あの子は瑪瑙だったかしら？動かなくなっただけとお口に合わなかった？」

「んー、多分ダイジョーブだと思うよー。こんな瑪瑙は久しぶりに見たのだー」

「今のうちに食べておくのですよー。再起動したらきつと食べつくされるのです」

「よくわからないけど大丈夫なのね？」

「あ、梢とウインクルちゃんの分を確保しておかないと……」

「そうだねー。後が怖いのはお断りー」

「はっ、思考が飛んでいたよ」

「おー、おかえりー」

とりあえずもう一つ『きびだんご』を口に頬張る。こんなおいしい食べ物は今までに食べたことがない。

「しかし、『きびだんご』はいつたい何なんだい？初めて食べたよ」「そうね、とある穀物を砕いて練って、きな粉をまぶしたのもとも言おうかしら」

「ふむ、穀物を練るとこんな弾力のある食感になるんですねえ。興味深い」

「あ、梢。おかえりなのです」

「あらお帰りなさい。お話は済んだのかしら？」

「とても有意義な時間でしたよ。ええ、ほんとに」

はたから見れば笑顔の二人の何気ない会話である。しかしこれほど恐ろしいものはそうそうないだろう。分からないならそれでいい、その方が幸せだ。

「おかえりなのだー。ウインクルはいつごろ帰ってくるのー？」

「そうですねえ、夕方くらいには戻ってくると思いますよ」

おかしい、ここはいつ冬になったんだ。たしかに徹底的に頼むと言ったが、昨日までの暖かい空気はどこへ行った。まあいいか、今は『きびだんご』を味わうとしよう。

「ほえー、アルネムー。ウインクル探しにいこー？」

「あわわわ、急いで行くのですよ！瑪瑙も早くするのです！」

「待て、まだ私はきびだんごを食べているのだが」

「つべこべいうんじやないのです！さあ、いきますよー！」

「きびだんごおおおおおおお！」

ああ、きびだんご、私はまだ食べ足りない。

「残りは全部いただいておくので心配しないでいいですよ、瑪瑙」

「あらまあ、もう見えなくなっただわね。お速いことで。それにしても大地が草花の尻に敷かれているのも滑稽なものね」

「そんなことはないですよ？大地がなければ草花は咲き誇れませんから。それだけ信頼されているだけのお話です」

「あの子の前で言ってあげたら？きつと喜ぶわよ？」

「言わぬが華です。そんな柄じゃないですからねえ」

こんな話があったとかなかったとか

さて、今日の前には魂が抜けたような顔をしている赤い妖精が一匹、ふもとから人里を一望できる崖の上で黄昏ている。

「お、はっけーん」

「ウインクルちゃん大丈夫ですかー？」

「ごめんなさいごめんなさい、おながが真つ黒とかいってごめんなさい、陰湿とかいってごめんなさい」

「あー、これは重症だな。梢も容赦ないことで……」

「まるでこの前の瑪瑙みたいだー」

「私はこんなになつたことはないとおもつのだが」

「たしかに、瑪瑙ちゃんはもつとひどかったのです」

「毎度思つがさらりとひどいことを言ってくれるな」

「さーて、シヨック療法なのだ。そおい！」

ゴキヤア！という音が一番あてはまるだろうか、物凄く鈍く、とつともなく重たい音だ。私もよく聞きなれている馴染み深い音である訳だがあれはとても痛い、痛いのだ。そんじょそこの妖精が抱きついてくるのは全くの別物。その破壊力に加えて反応することできないおまけ付きだから質が悪い。経験者が言うのだから間違いない。道行く妖精に聞けば誰もが『あれはもはやタツクルの音じゃない』、そう答えると断言できる。

「じぶう！あれ、フキいつのまに。はっ、まさか梢もいるの！？」

まあ、効果もてき面だがな。

「安心したまえ、梢は永琳といっしょにいるよ」

「痛い痛い飛んで行けー、えい！」

「ほわー、アルネムありがとう。君の優しさだけが癒したよ……」

「ふふ、ウインクルちゃんも元気なのが一番ですよ」

「そのとおり！元氣じゃないウインクルなんてウインクルじゃないのだ！」

「まあ、はやく元気になることに越したことはないぞ。『きびだんご』がなくなるからな」

「きびだんご……？もしかして永琳の持ってきたおかし！？もしかして今回梢が激しかったのはおかしの取り分増やすためかっ！」

「さてな、真相は本人のみが知っているだろうよ」

「くそう、やられた……。おかし……。」

「そんなこともあるのかと持ってきておきましたよ」

そういつとアルネムが懐から包みを取り出した。そこには、なぜそんな大量にと言いたくなるほどの『きびだんご』。

「もしやそれは永琳のおかし！？アルネムありがとう！愛してる！」

「どういたしまして。でも、もうちょっと、腕の力をぬいてくれると、助かるのです」

「あ、ごめんごめん」

さっきまで相当落ち込んでいたのにもうこのテンション、思わずアルネムに抱きついて頼ずりするほどうれしかったようだ。復活の早さは陽気の妖精ならではの早かったところか。

「アルネムはいい子なのですよー」

「手際が良いな。いつ確保したのやら」

「あははー、もちろん瑪瑙が気づかぬうちに決まっているのだー」

「そんな言い方をされると気になってしょうがないのだが」

「ま、細かいことはおいておくのが一番さ。……うめえー！」

「喜んでいただけでなによりなのです」

「人間の食べるものっておいしいんだねえ」

「そういえば『おつまみ』もおいしかったねー」

「ああ、あの干し肉か。塩味がきいてておいしかったな」

「またたべたいけどあの修羅場は勘弁だなあ」

「そうだ、永琳に作り方を教えてもらえばすべて解決しないか？」

急に全員が私の方にガバツと振り向いてきた。な、なんだ？何か変なこと言ったのか？

「な、なにかおかしいなことでも……？」

「ナイスアイデアですよ、瑪瑙ちゃん！」

「早速教えてもらいに行くのだ！」

「善は急げ、突撃だっ」

思い立つや否や、フキとウインクルは物凄い勢いで飛んで行った。正直に今の心情を言えば置いてけぼり状態だ。久々に思考が追いつかない状況に陥っている。誰か、私に考える時間を与えてほしい。まあ、こんな状況下でも一つだけ理解できたことはある。

「さっきまで落ち込んでたのが嘘みたいな勢いだな」

「落ち込んでいるよりずっといいのですよ。残りの『きびだんご』を食べたら私たちもいきましよう」

「ほう、ウインクルが食べ忘れるとはめずらしい。残さず頂くとしよう」

永琳はまだ帰らないだろうし、ゆっくり味わうとしよう。アルネムの優しさに乾杯だ。

「えーりんに『きびだんご』の作り方を要求するよ！」

「さあ、こちらに作り方を教えるのだ！」

「ついでに『おつまみ』の作り方も要求するのだ！」

処は変わり、梢と永琳のいる場所に帰ってきたわけだが、いきなり混沌とした光景が繰り広げられている。いきなりこんなことになったせいか、永琳も困惑しているようだ。

「ねえ、梢。これはどういうことかしら？」

「さあ……？まあ発作みたいなものですよ。よほど気に入ったようですね、きびだんご」

「さあ、返事は『はい』もしくは『いいわよ』のどちらかだ！」

「早くこちらに教えるんだよ！さもないとあつためるよ！」

「温めてもらつと肩こりとかによさそうね。お願いできるかしら」

「じゃあ後でこちらに作り方を教えてもらつよ！」

八意永琳、顔を合わせてからまだ間もないというのにウインクル達を制御している……。なんとという手腕、天才とはこういう存在のことを指すのか。しかもちゃっかり自分が得をするように誘導しているところがあなどれない。梢でもここまで鮮やかに誘導することはそうそうできることではないだろう。

「ところで『きびだんご』の作り方は教えてくれるのかい？」

「肩も温めてもらったことだし構わないわよ。それにしても、ウインクルはぼかぼかして気持ちいいわねえ……。一家に一匹ほしいところね」

「む、うちはあげないよ！みんなといっしょにいるんだ！」

「あら残念。気が向いたらいつ来てもいいのよ？」

「『きびだんご』のついでに『おつまみ』の作り方もお願いするの



ですよー」

「おつまみねえ……。ならこうしましょう。私がお願いを一つ聞いてくれたらたら、お返しに料理を一つ教えてあげるわ」

「あら、それはどういうことでしょうか？」

「料理？なんだそれは」

「分かりやすく言うときびだんごも料理のひとつよ。つまり、私のお願いを聞いてくれればおいしい料理を作れるようになる訳よ」

「えーと、『おつまみ』もお願い事を聞けば教えてくれるのですか？」

「もちろんよ。こうみえても料理は得意なの。期待していいわ」

「つまり、食べ放題ってことだね！のった！」

「ふむ、悪くないですね」

「これは楽しみになってきたな。期待させてもらおうか」

「フキもいいと思うよー。さっそく『きびだんご』を教えるのだ！」

「はいはい、焦らない焦らない。料理は下拵えがだいじなのよ？それではまず材料をそろえましょう」

「これであの食感がいつでも味わえる……。実にいいな」

いろいろな料理を教えてくれる流れになったようだ。フキとウィンクルもテンションがうなぎ登りである。でも、なんだかんだで一番楽しみにしているのは自分なのかもしれない。

永琳から料理を教えてもらうべく移動した私たちは人里の近くまで来ている。しかし、ここで一つの問題が浮上した。

「忘れていたわ。よく考えたら人里に妖精は連れて入れないじゃない……。」

「えーりんのおまぬけさーん」

「言い返せないのが悔しいわね　って、そういえばあなた達、この前はどうやって人里に入ったのかしら？」

「えーっとねー。フキががんばってそあい！ってやって入口から入ったんだよ！近頃は上から入ろうと思うとはじかれて痛いのです」

「上から入れないのは私の発明が原因ね。妖怪避けの結果が張つてあるから人間以外は通り抜けられないの。とりあえず、瑪瑙か梢、どうやって入ったのか詳しく教えてくれないかしら」

「そうですね……。それではおいしいものをもうひとつ教えていただけるといふのはどうでしょう？」

「本当にいい性格してるわ……。まあいいか、その条件でのみましよう」

「楽しみにしておくよ。して、フキが何をしたかというと、フキの力で人間に気づかれない『流れ』を作つてこつそり入っただけですよ」

「油断している時にちよつと意識が他のところに行くように『意識の流れ』を作つたのですよー。でも、効いてせいぜい数秒なのです」

「私がサポートして数秒ですからね。はじめて試した時は長くやり過ぎてフキちゃんが大変だったのですよ」

「それ、本当かしら？」

「む、えーりんの顔が怖いんだよ。しかめっつらだー」

「嘘は言つてないよ。うちもよく一緒に行ってるとし間違いない！」

「そう、それなら別々に入って中で合流しましょう」

「了解なのだー」

永琳が門番の人間に向かって歩いていく中、私はふと気がついた。

「しばらく永琳に意識がいくわけだから、『意識の流れ』を永琳に集中させておけば楽じゃないか？」

「さすが一個小隊の瑪瑙、今日は冴えてるね！」

「さー、さっそくいくのですよー。フキにかかればちよちよいのち

よいなのだ！」

「ふふふ、頼りにしてますよ」

「む、そろそろですね。フキちゃんがんばりますよ！」

「がってんなのだ！」

ちなみに人里には驚くほどスムーズに入ることができた。

「ふふー、ちよろいもんだぜ！なのですよー」

「驚くほどうまくいったな。次から潜入が楽になりそうだ」

「まったく見事なもの……。私が通る隙に入り込むなんて大したものだわ」

「えーりんの顔がまたしかめっつらだー」

「早くいこうよ！日が暮れちゃうよ！」

「まったく、手のかかる子供みたいねえ。きびだんごは逃げないから安心なさい」

きび団子を食べる準備はできているか？愚問だな、万全にきまっておろっ。

余談であるがこの日を境に妖精たちの間で料理ブームが巻き起こり、『サバイバル土大戦』の他に『みんなのお料理コンテスト』と題したイベントが新たに発足した。それにともない人里ではよく『鍋』が紛失するという事件が多発したそうだ。

「えーりんとみんなのッ」  
「愉快なきびだんごクッキング！」

永琳に料理を教えてもらうことになったわけだが、赤髪&銀髪コンビのテンションが異常である。さつそく先行きが不安だ。

「さあ、準備はいいかしら。びしばしいくわよ？覚悟しなさい」  
「イエス、ママ！」

この二匹のテンションはとどまるところを知らないのだろうか。

「さて、まず準備するのは『いなきび』ね。これをすりつぶして粉にしたものが主な原材料よ」

「よし、さつそくすりつぶすのだ！」

「落ち着きなさい。まずこのきびは一晩水につけておかないといけないの。そして一晩水につけたものがこれよ」

「先生、なんで準備してあるのですかッ！」

「たまたまよ、たまたま。次は、これを軽く洗った後に、水を少し加えてすりつぶすのよ。挽き方によって食感が変わるから好きな具合にやりなさい」

「うおおおおおおお、秘技！ウィンクル高速回転！粉々になれええええええ！」

「あははははははっ！甘い、甘いよ！フキはもつと速いんだからねえええええええ！」

「どうしよう、フキが壊れた。土合戦以来だよこんなこと」

「フキちゃんもつとおとなしくなかつたかしら……」

「たまに気分がハイになっちゃうところなるのですよ。しばらくすれば大丈夫です！」

「ならいいけど……。コホン、さて気を取り直していくわよ。すりつぶした後は適度に水を絞って、砂糖を加えて軽く練りなさい。ち

なみに砂糖はいれなくても大丈夫よ」

「さらさらしてますねえ。それに舐めてみるとほんのり甘いです」

「ふむ、砂糖というもので甘さを調整するのか。思いつきりいつてみよう」

とりあえず一つかみいれておけば問題ないだろう。ん、永琳がほかーんとした顔をしているがどうしたんだろう。

「永琳、どうかしたのかい？」

「いえ、なんでもないわ（なんだか胸やけしてきたわ……）」

「あれ、梢は砂糖いれないの？」

「ええ、私はこれでいいのです。お楽しみもありそうですからね」

「まさか気が付いているとはね。なかなか目ざといじゃない」

「ふふふ、褒め言葉として受け取っておきますわ」

「そろそろ仕上げになるわね。最後は一口サイズに丸めて沸かした湯で茹でるだけ。茹であがったものは冷水に通した後に水を切るのがポイントよ。あとはきな粉をまぶして食べるだけだから好きだけ食べなさい」

「まだかなまだかなー。おいしくゆであがるのですよー」

「むむ、いまだっ！うちの勤がいまがベストだと告げている！そいやっさー！」

「いや、あきらかに早いだろ」

ウィンクルが勢いよくきびだんごを掬い出すと同時に熱湯がふりそそぐ。

「あつちいいいいいいいいいいいいいい！！」

「あ、瑪瑙ごめんよ」

「ふふふ、熱湯かけておいて反省してないようだな。落とし前をつけてやるっ」

「は、やばっ。すみませんでしたー！」

「覚悟するがいい……」

「くそう、きびだんごを食べるまでぼくはしねないんだ！」

すかさず土の弾を打ち出すべく能力を発動　あれ、何も起きない。  
い。

「そうか、ここは屋内だから土はないのか」

「ほ、助かったー」

「なら、拳で語るしかないよなああああああああ」

「助かってなかった！うわあああああああああああん」

「まちやがれえええええええええええええええええ」

「二人とも！料理の邪魔なのです！叩きだしますよ！」

「ごめんなさいっ」

「まったく、あなた達といると退屈しないわね」

「ふふ、いつもこんな感じですよ。あ、私のきびだんごはそろそろですね」

途中でハプニングもあつたがとりあえず全員無事茹であがつた。  
もちろんこの後は試食会である。

「これであなた達にふるまつたきびだんごの作り方はおわりね。簡単でしょ？」

「んー、ちよつぴりつぶつぶした感じがたまらないですよー」

「むう、なんだかすごく甘いぞ……。まあこれはこれでありか」

「あの量の砂糖で平然としてるなんてすごいわね……。妖精に常識は通用しないのかしら」

「あれれー、ぱさぱさしてるー」

「馬鹿な、あれは完璧なタイミングのはずだった。なのに柔らかかす

ぎて弾力がない……」

「あなた達は茹でる時間を調整すればきっとよくなるわ」

「ところで永琳、もうひとつおいしいものを教えてくれるのではな  
くて？」

「もちろん用意してあるわ。私のお気に入りの『黒蜜』よ！きびだ  
んごとの相性は抜群だわ」

「それでは試しにいただきましょう……。なかなか上品な甘さです  
ねえ。癖になりそうです」

「気に入ってもらえてなによりです」

山も谷もない、そんな料理教室でしたとさ

六日目：料理人に私はなる！（後書き）

えーりんの頭脳は月人いちいいいいいいいいいい！語彙力が足りなくてひいひい言ってる作者です。こんにちは。物語の山を作りたいのに山ができないジレンマに悩まされております（・・・）

永琳はいずれ姫様も養うわけだから文武両道、才色兼備、永琳は料理もできる人だと思います。でも作者が一番好きなキャラは秋姉妹。いずれだせるといいなあ。

今後楽しく書いていけたらと思います。

ウインクル フキ  
赤髪&銀髪の銀髪ことフキの『流れを生み出す程度の能力』についての捕捉。簡単に言ってしまうとある目的を達成するための『流れ』をうみだせます。ぶっちゃけ妖精が持つ能力の中ではありえないほどすごかったり。レミアさんのものに近いものがあります。でも強力すぎるので、意志がある相手には1秒2秒、補助があっても数秒くらいしか効果がだせません。それ以上やるとぶっ倒れます。風の流れを生み出す程度ならそれほど負担はない設定。



## 七日目：好意が重たい、そう改めて思った今日この頃

ここは人里のとある建物の一室の中。窓から見える空は曇っており日は見えない。カチツカチツと時計が時を刻む音が淡々と鳴り響いている。テーブルの上にはよくわからない器具や得体のしれない液体の入っている容器が、整頓されながらも所狭しと並んでいる。鮮やかな赤、青、緑、黄色をはじめ、大理石状にきれいに混ざった物、濁った沼のような不快感を感じさせる物など様々である。人間が10人は軽く入れるような広さの部屋であるが、今は一人の女性がいるだけだ。服装は上半分の色が赤と青、下半分は上と逆の並びで赤と青のツートーンカラーとなかなか奇抜な配色である。白い細めの腰帯が上下の色の対比をさらに強めているため一目見れば忘れない人も多いだろう。その女性は書類作業をしているようで、卓上灯を灯し、黙々と手を動かし続けている。

カチツカチツ……。時計の針は進み続ける。それでも女性は作業をやめるそぶりを見せない。カチツカチツ……。淡々と時間を刻む音は鳴り続ける。

どれほど時間がたっただろうか。時計の長い針はすでに一回りし、窓からは曇りながらも日の光で少し白んでいる空が見えている。ようやく仕事を終えたのか、女性は眼鏡をはずしながら顔をあげ、静かに筆を置いた。女性はおもむろに立ち上がると、棚の中をあさり始める。どうやら嗜好品が詰まっているようで、その中から少し大きめの瓶が姿を現した。どうやら茶葉のようである。慣れた手つきで急須に湯を注ぎ、湯を捨てる。しかし、まだ茶葉はいれないようだ。湯の温度が高かったのだろうか。しばし待ってから再び急須に湯を注ぎ、湯を捨てる。今度は大丈夫のようだ。女性は茶を淹れてようやく、ほっと一息つく。だが、表情はどこか愁いを帯びている

ように見える。

「技術の発達しすぎた結果かしら……。皮肉なものね」

女性はひとり呟きながら茶を啜る。机の上に二つの書類がある。先ほどまで女性が書いていたものだ。一つは『穢れをはらう方法の研究』、もう一つは『穢れが人間に及ぼす影響』。

「まったく、お偉いさんも勝手なものね。」

空になった湯呑に茶を注ぎ、また一口茶を啜る。

「あげくの果てに、研究者に穢れをどうにかしろなんて頭の中は空っぽなのかしら」

ほどなくして茶を飲み終えた女性は両手を上にあげ、大きく伸びをしてからまた机に向かう。

「大体何をしたらこうなるのよ。ほんと、やってられないわ」

空を覆う雲は鉛色にかわっており、日は完全に雲によって隠されてしまった。まるで、これから起こることを感じさせるかのように。

ここは深い森の奥地、私のお気に入り場所である。なぜか？それは土の質がいいからだ。私はいろんな場所の土で彫像を作ってきたがここが一番しっくりくる。ちなみにこの場所は私が『私』を初めて認識した時にいた場所でもある。妖精は自然より生まれ出るもの故に生まれた場所が一番ということだろう。今日はどうやら曇り

のようだ。朝っぱらからこんな分厚い雲に包まれてたら今日一日曇りか雨だろうか。でも雨の妖精のテンションは通常運行だからそれはなさそうか……。晴れている方がよかったがお天道様ばかりはどうにもならないから仕方ない。

「ふむ、こんなところかな。いい出来だ」

「あれ、もしかしてうちを作ったの？」

ちなみに今日はウインクルをモデルに製作していた。会心の出来とっていいな。

「その通り、どこからどうみてもウインクルだろう」

「ほえー。瑪瑙ちゃんすごいですよ」

フキたち4人が感嘆のため息をこぼしている。ついに私の努力が認められたのだろう。

「ほう、以前はは訳のわからない何かだったのに、これはよく出来てますね」

「ご覧の通り私の彫刻技術は日々進歩している。常日頃から頑張っている成果がこのウインクルの像に現れたと言っても過言ではない。こうして並べれば本物と見間違っほどの出来だと自負している。…シルエットだけならだが。色はどうしても誤魔化すことはできないのが悩みどころだ。でも、ようやく私の作る彫像がよい評価をされたのでちょっとうれしい。」

「さて、完成したことだしこれはどこに置こうかな」

「んー、うちがもらっていいかなー？」

私が置き場所を考えているとウィンクルが声を掛けてきた。よほど気に入ってくれたのかもしれない。私の『認められた作品第一号』としてモデル本人に受け取ってもらえるのもなかなか乙かもしれないな。そうと決まれば私の答えも決まったようなものだ。

「作者としてもモデル本人に引き取ってもらえるなら冥利に尽きるな。見栄えがいいように飾ることを希望しようか」

「そうだね、うちの家にでも飾っておこうかねー。……そうだ！今日はみんなで行ってみたいところがあるんだった！」

行きたい場所か。この周辺は大体散策しつくしたが何か面白そうなものでもあったのだろうか。楽しそうな事なら大歓迎だ。しかし、次のひとことが放たれた途端、梢はいぶかしがるような、アルネムは不安そうな、そしてフキはしかめっつらになった。

「なんだか人里を一山越えたあたりが変な感じがするっておちびたちがぼやいてるんだよね」

よくあることだと思うのだが……。しかし、よくみたらウィンクルの顔もいつもより真剣だ。厄介事を持つてくるとは珍しい。よほどのことなのだろうか。そんな思考がぐるぐるまわる中、話は進む。

「ふむ。生まれたばかりの子たちは、ただぼやいているだけということが多いが……」

「気のせいでは？少なくとも私は何も知りませんが……」

やはり梢も私と同じことを思っているようだ。

しかし、そこでフキが無視できない一言を言い放った。

「なんだか澱んでる感じがすると……？」

「澱んでる……のですか？」

風精は風を具現するものであると同時に、流れや変化を象徴する存在でもある。故に変化に対して敏感だ。その風精たちの中でもこのあたりでは一番長く存在しているフキが異変を感じていた。どうやら本当に何かがありそうだ。

「たしかー、あっちから吹いてくる風がなんか変な感じがするのさー。こっ、木の実をつぶした後のネチャネチャした感じー」

「ふえー。なんだかしつこそうなのです。ああ、あの赤い実しか思い出せないっ」

「あー、確かにあの木の実はねばねばするよねえ。しかも臭いも微妙だし。我慢できるけど無視するにできないっていやらしいにもほどがあるよ」

「まったくもって、いやらしいほどに、絶妙に微妙な澱み方だな……」

現在分かっていることを整理しよう。まず、一山越えたところがどうもおかしいということ。その異常はフキも何かしら感じ取っているということ。そして、その度合いは絶妙な不快感をもたらすということ。大まかにまとめるとこの三つだ。……全く分らん。これらをつなげて考えても微妙な何かがあるという結論しか出せないではないか。

「真偽のほどがまったく不明瞭ですね……。手っ取り早くみんなで行った方が良さそうですね」

「さすが梢！話が早いね！」

「うー、いつぞやかみたいな危険がなければいいのですが……」

「アルネムー、みんな一緒なら大丈夫だよ！」

「そうだな。百聞は一見に如かずともいうしさっさと見に行ってし

まおうか」

いつ以来だろうか。久しぶりの遠出になりそうだ。

こうして、どこかしまらない妖精たちは『変な感じのする場所にむかって森を発った。』

時は昼過ぎ、私たちは現在山を登っている。……まあ、飛んでいるから正確には登っていないのかもしれないが気にしないことにしよう。山と言えば自然の代表的なものひとつといってもいいだろう。生い茂る木々、実る山の恵み、そして、そこに住む動物たちなど沢山の命が存在している。たまに妖怪も住んでいたりもすることもあるな。自然が豊かな分、妖精もそこらにいたることが一般的なのだが……。

「なーにもいないよー。いないよー、いないよー。あははははっ」

「おかしいな。明らかに数が少ないし、元気もない」

「たしかに……。普通なら樹木の妖精やら大地の妖精やらがもつと沢山いてもいいはずなのですが」

「さっき拾った子もぐったりしてます……」

「うーん、おちびたちの『おかしい』もあてになるもんだねえ。動物も全然見ないや」

アルネムをみればぐったりした妖精たちが沢山ひつついている。妖精の鈴なり状態だ。ひい、ふう、みい……。数えるのはもういや。飽きる。みたところ、グロッキー状態になっている妖精は主に樹木や大地の妖精、要するに山にいる代表的な妖精達だ。他の妖精はそこまでひどくないようでアルネムのうしろをついてきている。本当に若い妖精達によく好かれるなあ。少しうらやましい。面倒見

のいい性格に『元気にする程度の能力』となると、近くにいるだけで安心できるのかな？もしかしたら本能で何かを感じているのかもしれない。今のこの山の状況もまたしかり。

「どうもむこうに行くほど行きたくなくなってくるな。本当に嫌な感じとしか言いようがない」

「うーん、おちびちゃんたちがここまでぐったりしてるのは初めてなのですよ……。一旦戻って休ませてあげないと」

「いつそのことぶっ飛ばしたいなー。きつと嫌な感じも風が吹けばとんでいくよね！」

「フキ、その考えはおかしいよ。風で飛んで行くんだっいたらもう解決してるよ」

まったくもって物騒だ。風の女帝が降臨しないことを願おうか……。そういえば、前々回の土合戦で、再び風の女帝が降り立ったがあれはすさまじいの一言につきる。お前、妖精じゃないだろうと突っ込みたくなるほどの惨状だったな。嗤い声が聞こえたと思ったら、いきなり突風が吹き荒れて森の一角が吹っ飛ばすとは思ひもしなかつたよ。梢が本気で怒ったのは初めてだった気がする。『流れを生み出す程度の能力』は相当やっかいなようだ。フキはそのせいでしばらくの間、土合戦は出場停止となった。ちなみにあと一度審判したら解除されるとか。

「しかし、あまりここにいたくはないな。どうやら私と相性が悪いようだ。立っているだけでも重労働だよ」

「えっ、瑪瑙ちゃん大丈夫ですか！？まさかまたぶっ倒れたりしないですよー！」

……。しまったああああ！アルネムの地雷を踏んだか！？なんとか回避を……。それよりも、まずは落ち着かせることが先決か？もし

くは、大丈夫だ、問題ないとも言え少しは落ち着くか？だがまたよ。今までの経験則からいくと十中八九飛びついてくる。頭がシイクされることは間違いない。ここは一番いい対応を頼みたいところだが、まずいぞ。なにも思いつかない……！とりあえずの次善策だ。衝撃に備えながらも平気だということを伝える。これがベタ！、現状を打破できるはずだッ！

「今のところは問題な　ういつ!？」

「今のところはってことはまずいんですね!?早く戻りましょう、さあ皆さん急いで戻りましょう!」

心配してくれるのはいいけど、首がしまってる、しんでしまします。あれ……段々意識が……。一つだけ分かることは、どうやらまた駄目だったようだということだ。普段は落ち着いているけど、アルネムは焦ると話を聞かないからな……。無念だ……。

「アルネム、落ち着くんた。目の前が見えない……し、息ができ……きゆう」

「アルネムウー……！落ちつけえ！首が極まってるよ、瑪瑙がやばいって！おちびたちも怯えてるって！ああもう、おちびがまた落下した!」

「あらあら……。過保護過ぎても溺死するとはこのことでしょうかねえ……。」

「やべーのです。抱きついただけで瑪瑙を落としちゃったのですわーわー」

「いやああああああ！またやってしまったのですよー……」

分厚い雲の上の太陽は頂点を少し過ぎたあたりに浮かんでいる



「む、ここはどこだ？」

視界の霧がだんだんと晴れてくる。どうやらここはいつもの森の中の私の住処だろうか？空が見える。相変わらずの曇り空、時間が分からない。どれほど寝ていたのだろうか？妙に首筋がずきずきするな。寝違えた時のようなしつこい痛みを感じる。こればかりはどうしようもないのが性質が悪いことこの上ない。ん……？どうやら私を覗き込む顔がたくさん見える。ちよつと四つか？

「瑪瑙が起きたよー。おはようさんっ」

「うちのおねーちゃんがおきたのだー」

「おきたぞー」

「わー。羽が水晶見たいー。まっしろー」

「なんだか落ち着くねー」

以前も似たようなことがあったような無かったような、まあいいかなんだかいつもより声が多い気がする。起き上がって、現状を確認しよう。まずはそれからだ。周囲を見回す。……大地の妖精たちが、なぜか私にひつついてる。私はアルネムじゃないぞ？瑪瑙さんですよ？あ、その子。羽引っ張らないで、結構痛いぞ。

「フキよ、いつのまに大地の妖精がこんなに増えたんだ？」

「え？連れて帰ってきたからに決まってるじゃないー。お昼に拾ってきた子たちだよー」

「お昼……？ああ、たしか『変な感じのする場所』を見に行ったんだっただな。どうやらまだ頭がぼーっとしているようだ」

フキの顔が、心なしか呆れているように見える。またか、またなのか、と。ところで私はなぜぶっ倒れたのだろうか。たしか、あそ



し考え事してただけだろうに！」

「瑪瑙を引き戻すにはショック療法がいちばんなのです。こーでもしないと1週間そのままなのです。えっへん」

言い返す言葉が無いな。また、思考の海に沈んでいたのか……。だが、もっとほかに方法はないものかと思いたいぞ。その一仕事終えたような自慢げな顔をつつきたい。

「瑪瑙は一度のめり込むと自分のことをほっぽり出すことが多いのだ。瑪瑙の少しはわりとやばいなのですよー」

「そんなつもりはまったくないのだが……。自分が自由に動けないと何もできないだろうに」

「そのうち気づけばいいねー。さあ、みんなに顔を出しに行くよ！」

今日のフキはなにやら饒舌だな。普段はこんなに突っかかってはこないのだがどうしたのだろうか。いつもタツクルしては満面の笑みを浮かべてくるのに今日はなんとというか、少し離れた所から見守るアルネムのような。とりあえず、拾ってきた大地の妖精たちが地味に重たい。しかし、どかす気にもならないのは不思議だな。いつも若い妖精を乗っけているアルネムもこんな気分なのだろうか。

「やれやれ、いちいち大騒ぎすぎだろう。いつものことだろうが」

「これがいつものことだということに異常を感じるねっ！さあ、いっくよおおおおおおお！」

「「がってんなのだ！」」

「うひゃい！？ちよっ、いきなり後ろから抱きつかないでくれ！って、持ち上げられてる！？」

だめだ、脇腹は弱いんだッ！その妖精、フキをうらやましそうにみるんじゃない。お断りだ！

「あはははははははははは！風が気持ちいいのだー！」

「やめ……速すぎるって！？また気絶するって！」

「まだまだ大丈夫だねっ！ひゃっほー！」

「うわああああああああああああああああああああ」

「風のおねーさんはやいよー」

「はやいねー」

「あ、おねーちゃんいつちゃった」

後ろを見る。がんばって追いかけてくる妖精達が見えるが、流石に速度が違い過ぎるようだ。まあ、フキに追いつける大地の妖精がいたらそれはそれで恐ろしいけどね。あ、真ん中の子がころんだ。

「フキ、一人転んだぞ」

「え？それはそれは一大事なのだ！。瑪瑙もなんだかんだで平気ですね」

「慣れって怖いとつくづく思わないかね？」

結局、大地の妖精たちを頭に、背中に乗せて私たちはみんなのところに向かうことになった。ああ、平和だな。どうでもいいけど、おちびという響きは結構いいかもしれない。本当にどうでもいいな。

また一日変わらない日常が過ぎていく。異変の兆候を見せながらも一日一日、刻々と。

ー挿話 うごめく「ナニカ」ー

ここはなに？私は何？ここは少し前までとても明るくてうるさ



ああ、あそこに人の気配がする。ドウシテダロウ、とてもむしやくしゃしてくるよ。壊したくなるよ。穢したくなるよ。まっくろに色が分からないほどに染め上げたくなるよ。そうだ、それが私の存在意義？私が生まれた理由？心の中にすとなにかがはまった気がする。そうだ、あるときもこの力を使ったんだっけ。そうだ、確か使ったんだ。ああ、はるかかなたまでイってしまいそうなくらいいい気分だ。いま力を使ったらどんなに気分がいいだろう。思い立ったらすぐやるのが大事だね。この『染まり染めあげる程度の能力』を存分にふるってやりたい。そんな気分だ。

七日目：好意が重たい、そう改めて思った今日この頃（後書き）

ここまで読んでくれた方々へ感謝の意を。初めましての方は初めまして。以前読んだことある御方はお久しぶりです。私の現状は活動報告にあげられる時に上げていこうと思いますので、お暇な方はのぞいていただけると幸いです。

さて、プロットを大幅に練り直してようやくここまで書けました。この間、実に一カ月以上。完結まで頑張っていきたいです。それではまたお会いしましょう（´・`・´）ノシ

## 八日目：平穩は ある日突然 去ってゆく

ここはとある深い森の中の開けた場所。ここは妖精たちの集まる場所。そして、ここは私たちの大好きな集会場。時は夜明け、ここにいつものメンバーが集まっている。梢はうんざりとした表情、フキは考え込んでいると思っただけならその場でくるくる回りだしたりと傍目からは理解できず、アルネムは少し疲れている様子で、ウィンクルは腕を組んだまま唸っているがどこかしらそわそわとしている。私はどうかって？そりゃあ彫像を作っているにきまつているだろう。モデルは私を含めた仲良しメンバーだ。なんで彫像を作っているかって？そりゃあこの場の空気がかたまりに重たいからさ。

さて、こうして集まっているわけだがもちろん訳がある。先日行った山についてだ。あの日はアルネムの暴走により断念してしまった。だがしかし、流石は妖精というべきかやっぱり妖精というか、大本を確認しないままだと気になってしょうがない。しょうがないのだ。確かに危ないということは分かるし、正直よくないものというのも分かる。でも、一度好奇心という名の導火線に火が付いてしまえば爆発するまでは止まらない。この目で確認するまでは諦めてなるものか。さらに、私以外にもウィンクルやフキが、澱みの正体が気になってしかたないという様子。となると、当然澱みのもとに突っ込んでいくのは自明の理。枯れ葉に火をつければ燃え上がるほど自然なことだ。

そんな訳で招集をかけた結果がこれである。ちゃっかりと、いつものまにかおちび達というオーディエンスまで増えている。いつもなら梢もやれやれといったまんざらでもない感じなのだが今回は違うらしい。警戒の度合いが全く違う。アルネムもさつきから私を見ながらため息ばかりついている。なぜ私だけ……？よくみれば梢の視線も私に向いている。あれか、あの場で倒れたのがいけないのか？だがあれは物理的に眠らされただけで私は何もしていないぞ。



だれもしやべらず、もくもくと土を削る音だけが鳴り響く。横を見ればフキの回転速度が上がっており、砂埃が軽く舞っている。フキよって流れる風を受け、意を決したような表情でウインクルが声を上げた。

「もう一回言うけど、あの山をもう一度見に行こうよ！」

フキが止まり、梢とアルネムはウインクルに顔を向けた。すべて同時に狂いなく、それらを一齐に受けたウインクルがすこしたじろぐ。そんな中はさりげなく梢に視線を向けてみる。そこにいるのは一人の修羅だった。口はまっすぐに閉じられ眉間にしわが寄っており、目は半眼開きの妖精が静かにウインクルをにらみつけている。濃い緑の妖精から放たれる威圧感に冷たいものを感じさせられてきた。これ以上直視できる自信がない……！逃げるように視線を外し、次はアルネムを見る。梢のような凄みは感じないがさきほどからおどおどしており、なぜだか私と梢をかわるがわる見ている。あの表情はきつと頭の中で不安が渦巻いてはあれはこれとは考えているに違いない。下手につつくと意識を落とされる可能性が高いと私の本能が告げている。藪をつついて鬼を出す必要はないからここは何もしないのがいいだろう。さて、再び梢に視線を戻すとちょうど口を開いたところだった。

「本気で言ってるのですか？言っておきますがあそこは私のような樹木の妖精には居すわりたくない場所です。草木や花、そして大地の妖精の憔悴ぶりはひどいものだったでしょう？」

その形相は人が語る鬼の様に恐ろしいものをしていた。見ているだけで体が震えてくる。直視していられないなら視線をそらすのは道理である。というわけで横を見れば、こちらの様子をみていたおちび達が震えていた。軽い気持ちでのぞぎに来た場所に修羅がいた。

わくわくしながら身に着た結果、心が落ちつけられないのはかわいそうだな……。ここは長く生きてきた私が勇気を出すべきだろう。大丈夫、味方はいるから大丈夫だ。一つ息をつき意を決して梢に話しかける。

「梢よ、もうすこし落ち着いたらどうか？おちび達が恐がっているぞ。というか私も怖い」

ぐりんと梢の首がまわり、その視線が私を射抜く。表情が変わらない顔からは伝わってくる迫力は尋常でなく、たらりと頬に汗が伝ってきた。まるで恐ろしい妖怪を前にしているかのようだ。ちなみに妖怪とはなにやら人とは違い様々な姿形をしている。言葉は人と一緒だったり意思疎通が取れたりコミュニケーションを築いたり人間に近い習性を持つているものもいれば、特にそうでないものも少なくないのでよくわからない存在だ。ただ、人間とは明らかに違う点がある。それは、人を喰らい、生きる者たちを恐れさせる存在ということだ。まあ、たまに気のいい奴もいるのであくまでも基本的はということが重要かもしれない。なんだかよくわからないということしか浮かばなかったが話を戻そう。とにかく梢の気が収まっていない。だが、そんな殺伐とした空気の中に颯爽と救世主が現れた。

「辛気臭いことこのうえねーのです。そいやあああああ！」

「はいっ！？ぎゃああああ！」

この質量をもったかのような空気を吹き飛ばしたのはみんなのムードメーカーフキさんだ。棒立ちの状態からでも目にもとまらぬ勢いですつとんでくる伝家の宝刀の体当たりは見事に決まり、抱きついたらまま梢を押し倒し、勢いを保ったまま地面を物凄い速さで転がって行った。積もっていた落ち葉が舞いあがり、ひらひらと落ちる様はなかなか趣がある。今しがた起きた急な出来事におちびたちは

ぽかんと口を開けたまま呆けているご様子、アルナムはあわあわと慌てつつも二人を追って森の奥深くへ、ウインクルは小さくガッツポーズをとっている。その信じていたぜといわんばかりの表情がなぜだろうか、とてもどつきたくなる。とりあえず土玉でもぶつけておこう。

「えい」

「どわああ！？目があああああ」

勢いよく飛んで行った土玉はちょうど眉間のあたりで爆ぜたようだ。ナイスショット、どんぴしゃだね。いまなら飛ぶ鳥も落とせる気がする。土玉を飛ばす時の小気味のいい音が癖になるなあ。ついつい投げたくなってしまう。

土玉が碎ける音を聞きつつ、ウインクルに土玉を飛ばしつつ暇をつぶしていたが、ふと違和感を感じた。これは土合戦の時に狙われている時のものに近い。とりあえず頭を下げる。するとどうだろうか、先ほどまで顔があった場所を高速で通過する土の塊。飛んできた方向は前方だ。

「だから痛いって！いい加減投げるのやめろよ！」

「いや。面白いのでつい、な」

どうやら下手人はウインクル。おまけに手首のスナップだけで投げてきたようだ。長いこと一緒に戦ってきた友は伊達じゃない、こちらの土玉を避けつつも精度と威力を両立させた反撃は見事の一言に尽きる。面白い、わくわくする気持ちが止まらないさあ、楽しい戦いの始まりだ。

「よし、もっとペースを上げていこうかね！」

「ああ？さっきから投げまくりやがって。こっちも手加減しないか

らなー！」

おちびの妖精達が見守る中、陽気の妖精と大地の妖精の戦いの火ぶたが切って落とされた。

戦いが始まって半刻ほどの時間がたっただろうか。なぜか周りにいたおちびたちも便乗してきてそれなりの規模の戦になってしまった。みんな疲れ果てて寝転がっている。今この場に立っているのは私とウインクル、そして膝に手をつきながらもなんとか生をつないだ数少ないおちびのみだ。

「ぜえ、ぜえ……。どうしてこうなった」

「はあ、はあ……。ああ、なんでだろうな。とりあえず私たちが原因ということだけは確かだな」

この状況を一言で表わせば、まさに死屍累々といったところか。本当にどうしてこうなった。やれやれといった表情のウインクルが続けて口を開く。

「まったく、確信犯にしかみえないよ」

「私はこうなるとはこれっぽっちも思ってたのだがな。それよりもフキ達はいつ帰ってくるのだろうか」

フキ達が姿を消した森の奥に目を向ける。何の音沙汰も無い。みんなが戻ってくるまで何をしようかな。でも、疲れたせいで何もする気が起きない。こういう時はお空でも眺めてみよう。うむ、見事な曇り空だ。

「久しぶりにきたけどこれはどういう状態なのかしら？」

力尽きて地面につぶれている私たちに向けられる声の一つ。青い帽子、赤と青のツートンカラーの出で立ち、背には弓を携えている。そこには独特な物静かな雰囲気を漂わせる人間がいた。このようなところまで来る人間は一人しか知らない。そう、妖精達から料理マスター、困った時の助けてえーりん、お菓子の人と様々な呼び名をいつのまにかつけられていた人間こと八意永琳だ。その顔にはやれやれといった表情が浮かんでいる。

「兵どもが夢のあと、といったところかな」

「詳細は分からないけど、あなた達はいつもやることなすことが突飛ね」

「あ。えーりんだ！」

「えーりんだ！まじえーりん！」

いままでへばっていたおちび達がいつせいに騒ぎ出して永琳のところに駆けつける。それもそのはず、いつも食べ物なりお菓子なりを持ってきているからな。おいしいお菓子は大人気で料理ブームが巻き起こるほどのものだ。最近は大分沈静化してきたとはいえ、相変わらず人気である。永琳からお菓子をもらい食べながらのんびりしていると、ようやくフキ達の声が聞こえてきた。

「あ、永琳がいるよ」

「あ、ほんとなのです。永琳お久しぶりです」

肝心の梢さんかというと、先ほどまでの鬼に迫るような覇気はなりを潜めて普段通りの装いだ。どうやらフキがうまく言いくるめてくれたようだ。流石フキ、『流れを生み出す程度の能力』をもつ妖精は頼りになるようやくこれで一息つけるというものだ。生憎と空

は曇っているが吹き付ける風は心地がいい。

「ふむ、これは好都合ですね。ちょっとお願いがあるのですが」  
「あら、梢からお願い事をしてくるなんて珍しいわね。何かしら？」  
「人手が一人でもほしいのですよ。行く場所が行く場所なので」

どうやら私は問題児扱いらしい。コンチクショウ、悔しくなんかはないんだからな。決してだ！

どんよりとした空の下、私はぼーっとしている。

「梢にアルネムにフキに永琳、妖精達のブレイン+ が話しこんでいる中、絶賛蚊帳の外にされた瑪瑙です」

「いや、そんなこと言っても何も変わらないからね」

「愚痴ぐらいいいだろうに。口を出そうとしたら『……何か？』って満面の笑みを向けられたんだぞ」

「笑顔で殺せる女って恐ろしいよね。うちもさつきやられたよ」

「暴風トラブルメーカーは話の輪に溶け込んでいるのが不思議でない。ところでこの彫像をどうおもう？」

「もはや目の前の一場面だよ。瑪瑙の彫像も無駄に洗練されてきているね」

「じつは能力で動かせるようになりました」

「なんだって……！？くそっ、うらやましい！」

これぞ日々の積み重ねのたまものだ。どうやら土を固めて削って飛ばし続けて力の掛け方をつかんだのだろうか、私の能力が『土を固める程度の能力』から『圧をかける程度の能力』になっていた。能力が変わってからというものの、固めるだけではなく自在に力を

かけられるようになったようだ。土以外にも、土にかけられるほどではないが圧力をかけられるのが驚きだね。おかげでいままで彫像を削るところまでしか効かなかった能力が御覧の通り、人形劇に加えてちよつとした演出ができるくらいまで出来るようになりました。

「ところで梢と永琳たちはいつまで話し込んでいるのだろうか。暇を持って余してしょうがない。」

「わー、そんなことよりも動く彫像ってすごいねえ」  
「常に進化し続ける、それが瑪瑙クオリティだ」

おちびたちはすでに散り散りお好きなところへ、私とアルネムは二人残されこうして即興劇で暇を潰している。この劇に声加われば完璧なのだがそううまくいかないようだ。どうしたものか。

「やはり声があつた方がおもしろいな。だが、本人を呼んでくるのはナンセンスだ。」

「だねえ。いじれないもんねえ」  
「まったくだ」

ここまで動かせれば一場面を再現することも可能だ。声があればなおよしだ。夢は無人大である。だがしかし、声真似をしようにも私一人では限界があるからどうしようもない。口は一つしかないのだ。ん、一人？これはいいかもしれない。おちびたちを何人が共犯にすればいける……！閃いたらこつちのものだ、ふふふふ。

「ねえ瑪瑙、その顔は碌でもないことを思い付いた顔だよ。梢に見つかったら微笑まれるよ」

「人聞きが悪いな。いたつてご立派な考えだぞ」

「ま、面白くてうちに被害がこなかったらべつにいつか」

「期待しておくといい。ふっふっふ」

「うわ、安っぽい笑いだなあ」

ウインクルと雑談をし続けてだいぶ時間がたったわけだが未だに二匹で駄弁っているだけである。そろそろ梢たちの会議が終わっていてもいいと思うのだが。ふとみればたった今終わったのか、こちらに来る一人と三匹の姿が見えた。

「ようやく話しあいはおしまいかな？正直待ちくたびれたぞ」

「そうだそうだー。というわけで山の向こうを見に行こうよ！」

「まったくあなたという妖精は……。まあいいでしょう。そのために永琳にもついてきてもらうことにしました」

「ほう。それは心強いな」

なるほど、先ほどの話し合いは永琳をどうにかして連れて行くためのものだったのか。しかし、先に危険しかないようなところにわざわざ行く気になるというのも妙なものだ。

「私が言うのもなんだかあれだが、よく永琳は行こうと思ったな」

「あら、一応理由はあるわよ？人里でちよつと病気の蔓延がひどくてその原因を調べているところだったの」

「なんだか重たい病気らしいのですよー」

「そして、そこに今回の澱みの件が入ってきたうえに流行り出した時期と重なるそうなのだー」

「ふむ」

どうやらきな臭くなってきたようだ。澱みが生まれてから人里に病気が流行り出した。たしかにこれは無関係には思えない。もし関係あるとするならばその澱みは人間に対して有害であるということだ。先日、山の向こうまではいけなかったがその道中にあった自然や住んでいた妖精達は大分衰弱していた。そして、衰弱していたの





「いつものことです」

「瑪瑙は一度考え込むと話を聞かないからねえ」

風は根こそぎさらってゆく、そんな曇りの昼の事

「あわわわ、怪我してないといいのですが」

「ほんとに大丈夫かしら……」

だが風の跡には不安の種は残ったようだ。

「髪の毛に挟まった木の枝とか葉っぱが絡まって取れません。瑪瑙です。」

「あはははー。ふくれっ面だー」

「はいはい、文句垂れてないで行きますよ」

5匹と一人が山道に行く。永琳は手もとの通信機とやらで何かお話を、フキと梢は先頭を歩き、アルナムとウインクルは私の頭をいじっている。髪の毛に木の枝やら葉っぱやらが絡まって大変だ。くせ毛っぽくなっている私の頭はさぞかし賑やかになっていることだろう。おなじく癖っ毛のある髪をしているフキにはまったくいいほど絡まっていないのが憎らしい。風でちゃっかり飛ばしていたのだろうか、流石風精である。

さて、ひと悶着はあったがようやく山の向こうを再び見に行く流れになったのは幸いというものだ。気になって眠れないところだったからともうれしい。だが、うれしいという気持ちの他にも不安はある。先日はまだ目的地にはたどりついていなかった。だがそこには明らかに弱っていた妖精達。妖精が弱るということは自然が何かしらの原因で弱っているということだ。いったい何が起きたのだ

るうか。

「どうやらここら一帯の妖精達は逃げてしまったのか」

「たしかに妖精の気配がまったくくないのですよ」

突如、私の頭に激痛が走る。

「いってええええ！今、ブチイって音がしたぞ！何をしたっ！」

「ごめんよ瑪瑙、枝を引き抜くときにミスっちゃったね」

「ウインクルちゃん、だからあれほど丁寧にするようにと言ったのに……」

丁寧……？あの力任せに引つ張ったような抜き方が丁寧？陽気の妖精の頭の中はどれだけハッピーなんだ。

「ウインクル、てめーは私を怒らせた。後でのしをつけてお返ししてやるう」

「あはは、ごめんごめんって」

くそう、あとでウインクルおやつを全部食ってやる。

「あなた達には危機感ってものはあるのかしら？一応この先は危険かもしれないのよ？」

「妖精は好奇心の塊なのですよ。無理言わないでください」

「なんだなんだ。稍ってば反対しておいて結局行きたかったのかっ！」

「今はいざという時に対処できる手立てがありませんからね。無策はいけませんよ？」

説得力をあまり感じられない梢を見れる珍しいなあ。

他愛のないことを言い合いつつ、先を進んでいく。そしてちょうど山を越えようかとした時、急に寒気を感じた。

「……っ。なんだこれは」

「瑪瑙ちゃん？どうしたのですか？」

突如、得体のしれない不快感が降りかかってきた。綺麗な場所に汚い何かをぶちまけたかのような不快感が私を襲う。見えない何かがじわりじわりとしみ込んでくるような不快感。助けて、助けて、タスケテタスケテ……。自然が、大地が悲鳴をあげている。頭を殴りつけられるような痛みがガンガン響く。こんなことは初めてだ。飛んでいる状態を保てない。

「瑪瑙！？」

「うあ……？大地が哭いている……？」

思わず地面に膝をつき頭を抱えてしまった。頭痛がどんどんひどくなってくる。金切り声、叫び声、他の皆に聞こえていのか？妖精は自然の具現である。大地の妖精は大地と樹木の妖精は木々と、草花の妖精は草原と、そして風の妖精は移ろいゆく自然と深くかわりがある。

そんな中、大地の妖精である私が苦しんでいる。この事からいえることは

「大地が 汚されていく？いったい何に……？」

大地の思念が伝わってくる。汚れてしまう、染まってしまう、助けて、と。気づけば不安そうな顔で皆が私を覗き込んでいた。どうやら心配をかけてしまったらしい。アルネムの『元気にする程度の能力』のおかげか頭痛は続いているが少しはましになってきた。ま

だいきる。

「瑪瑙ちゃん、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。それよりも原因が気になる」

「あまり無理はしてほしくないのですが……。いいですか？私の能力にも限界はあるから我慢は駄目ですよ？」

アルネムからは納得しきれないがしぶしぶといった雰囲気を受ける。ましになったとはいえまだきつい。たしかに、これは私だけできたらまずかった。梢が正しかった訳だ。ちよつと悔しい。ふと永琳を見ると何やら難しい顔をしている。永琳はいつも考え事をしてるなあ。ちよつと話しかけてみることにしよう。

「ところで、永琳。なぜそんな難しい顔をしているんだい？」

「ええ、以前きた時は大地、草花、樹木の妖精が弱っていたのよね？」

「そうだよー。おちび達がいっぱい倒れてたから大変だったんだよー。この山から妖精がいなくなっちゃうくらいに。この山、大丈夫かなあ……………」

永琳の疑問とそれに対するウィンクルの答え、これに違和感を感じた。そう、以前来た時は大地の妖精以外にも被害は出ていた。だがしかし、今は私だけ。

「……………まっってください。私には今のところ何ともない？」

「あれ……………？なぜでしょう？」

「瑪瑙、妖精は自然を感じ取ることができるようなのよね？」

「ああ、その通りだ。現に私は大地のあがる悲鳴を聞いているよ」

「なら、声が聞こえなくなる状態ってどのような時かしら？」

「それは。まさかッ！」

山を下りきつたのだろうか、急に目の前に開けた空間が広がった。

「なんですかこれは……」

「自然が死んでいるのです……」

草木は腐り、大地は黒ずんでいる光景が広がっていた。そして

「あなたはいつたい何者かしら？自然の息吹を感じられないここにどうしているの？」

永琳が語りかける。全てが息をひそめるこの地に立っているその少女に。

「あははっ。ぼくのことですかぁ？おかあさん？」

不快感。それしか感じられない少女がそこにいた。

八日目：平穩は ある日突然 去ってゆく（後書き）

初めましての方は初めまして。久しぶりの方はお久しぶりです。書き上げると言ってからだいぶ経ってしまいました。が何とか生きています。ようやく8話目を書きあげることができました。展開をどうつなげていくか、無理はないか、そういうことを考えながらぐるぐるした結果こうなりました。最期がなぜ少女か？東方だからさ。まだまだ拙いところばかりですが今後も読んでいただけると作者冥利に尽きます。

それでは今回はこのあたりで失礼しますゞ（ゝ・ゝ・ゝ）ノ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2582q/>

---

妖精さんファンタジーライフ

2011年10月7日23時59分発行